

<序 文>

小郡市は、北部・中南部における宅地開発や北東・中南部における工業団地の開発が相次いで行われ、現在福岡・久留米両市のベッドタウンとして日々発展を続けています。これに伴い、交通網の整備も着々と進行しつづけます。

今回ここに報告いたします「大板井遺跡 29」は、店舗建設に先だって小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。遺跡は、甘木鉄道大板井駅の北側に広がる丘陵地に位置し、大正 12 年 (1923) にその存在が指摘されて以来今日に至るまで着々と遺跡の状況が明らかになりつつある、小郡市の代表的な弥生時代の集落遺跡として著名な大板井遺跡です。今回の調査でも、弥生時代後期後半の集落動態の一端を確認することができました。また、近年、研究が深化しつつある小郡官衙遺跡周辺に位置する遺跡であることから、古代の集落像も近年整理されつつあり、今回の調査でもその一端を確認しています。これらの調査成果が、小郡市の歴史を復元する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、地権者さん、調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々へ深く感謝を申し上げます。序文といたします。

平成 28 年 3 月 31 日
小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

<例 言>

- 1、本書は、小郡市大板井地内における店舗建設事業に伴って、小郡市教育委員会が平成 26 年度に発掘調査を行った大板井遺跡 29 の埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2、遺構の実測、遺構の写真撮影は西江幸子が実施した。
- 3、遺物の実測は西江、久住愛子が、製図は久住、白木千里、宮崎美穂子が、洗浄・復元には、衛藤知嘉子、佐々木智子、深町幸子、藤岡恵子、山川清日、永富加奈子ら諸氏に多大なる協力を得た。また、遺物の写真撮影は(有)システム・レコに委託した。
- 4、遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系(世界測地系)に則している。
- 5、本書で用いた標高は、東京湾平均海面(T. P.)を基準としている。
- 6、本書で用いている略号は以下のとおりである。
住居跡: SC 周溝状遺構: SV 溝: SD 土坑: SK ビット: P
- 7、遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
- 8、本書の執筆・編集は西江が担当した。

本文目次

第1章 調査の経過と組織……………	1	第4章 遺構と遺物……………	3
1. 調査の経緯		1. 住居跡	
2. 調査の経過		2. 周溝状遺構	
3. 調査の体制		3. 溝	
第2章 位置と環境……………	2	4. 土坑	
第3章 遺跡の概要……………	3	5. ビット	
		第5章 まとめ……………	25
		1. 大板井遺跡29の遺構の時期とその	
		変遷について	
		2. 大板井遺跡29周辺の遺跡動態	

挿図目次

第1図 大板井遺跡29調査区位置図(S=1/10,000)
第2図 大板井遺跡29周辺遺跡分布図(S=1/50,000)
第3図 大板井遺跡29遺構配置図(S=1/80)
第4図 1号住居跡実測図(S=1/60)
第5図 1号住居跡出土遺物実測図①(S=1/4)
第6図 1号住居跡出土遺物実測図②(S=1/4)
第7図 1号住居跡出土遺物実測図③(S=1/4)
第8図 1号住居跡出土遺物実測図④(1~5:S=1/2, 6:S=1/4)
第9図 2号・3号・7号住居跡実測図(S=1/60)
第10図 5号住居跡実測図(S=1/60)
第11図 6号住居跡実測図(S=1/80)
第12図 1号周溝状遺構、1号溝実測図(S=1/60)
第13図 2号・3号・5号・6号・7号住居跡、1号周溝状遺構、1号溝出土遺物実測図 (19:S=1/2,その他:S=1/4)
第14図 1号・2号土坑実測図(S=1/40)
第15図 3号・4号土坑実測図(S=1/40)
第16図 5号・6号・7号・8号土坑実測図(S=1/40)
第17図 9号・10号土坑実測図(S=1/40)
第18図 土坑出土遺物実測図(S=1/4)
第19図 ビット出土遺物実測図①(1・2:S=1/2, 3:S=1/4)
第20図 ビット出土遺物実測図②(S=1/4)
第21図 大板井遺跡29の遺構変遷図(S=1/320)
第22図 大板井遺跡周辺の遺跡分布図(S=1/35,000)

表目次

第1表 大板井遺跡における弥生時代の消長 大板井遺跡29出土遺物観察表
--

図版目次

- 図版1 ①調査区全景（真上から）
②1号住居跡完掘（真上から）
③1号住居跡遺物出土状況（西側から）
④1号住居跡遺物出土状況 up（西側から）
⑤1号住居跡遺物出土状況 up（西側から）
- 図版2 ①2号住居跡完掘（東側から）
②3号住居跡完掘（西側から）
③7号住居跡完掘（東側から）
④3号・7号住居跡土層断面（西側から）
⑤5号住居跡カメラド検出状況（南側から）
⑥5号住居跡完掘（南側から）
⑦6号住居跡完掘（東側から）
- 図版3 ①1号周溝状遺構完掘（東側から）
②1号周溝状遺構東壁土層断面（西側から）
③1号周溝状遺構・1号土坑土層断面（北側から）
④1号溝東壁土層断面（西側から）
⑤1号溝完掘（東側から）
⑥1号土坑完掘（北側から）
⑦2号土坑完掘（東側から）
⑧3号土坑完掘（東側から）
- 図版4 ①4号土坑土層断面（北側から）
②4号土坑完掘（北側から）
③5号土坑完掘（東側から）
④6号土坑完掘（北側から）
⑤7号土坑完掘（北側から）
⑥8号土坑完掘（南側から）
⑦9号土坑完掘（南側から）
⑧10号土坑完掘（南側から）
- 図版5 出土遺物①
図版6 出土遺物②
図版7 出土遺物③
図版8 出土遺物④

第1章 調査の経過と組織

1、調査の経緯

大板井遺跡29の発掘調査は、小郡市大板井字原口332-1における店舗建設に先立ち、地権者より平成26年4月14日付で小郡市教育委員会に対して埋蔵文化財の有無に関する照会(審査番号4005)が提出されたことに始まる。市教委では、これを受けて平成26年4月28日に申請地の試掘調査を行った結果、地表下約30cm～40cmの深さで遺構が確認されたため、開発に先立って埋蔵文化財に関する協議を行った。

協議の結果、敷地のうち共同住宅建設部分についての170㎡について発掘調査を実施することとなった。

2、調査の経過

発掘調査は平成26年6月10日から同年8月11日にかけて実施した。調査の主な経過は以下のとおりである。

- 6月10日 表土剥ぎ開始。(～11日)
- 6月12日 発掘作業員を投入し、遺構掘削開始。
- 8月1日 全景写真撮影。
- 8月6日 遺構実測終了。
- 8月11日 現場引き渡し、調査完了。

3、調査の体制

大板井遺跡29の調査の体制は、以下のとおりである。

[平成26年度]

小郡市教育委員会

教育長	清武 輝
教育部長	佐藤 秀行
文化財課長	片岡 宏二
係長	柏原 孝俊
技師	西江 幸子 (調査担当)

[平成27年度]

小郡市教育委員会

教育長	清武 輝
教育部長	佐藤 秀行
文化財課長	片岡 宏二
係長	柏原 孝俊
技師	西江 幸子 (整理担当)

[発掘作業従事者]

石井京子、草場誠子、佐藤照子、土井久江、
深見篤志(敬称略)



第1図 大板井遺跡29 調査区位置図

(S=1/10,000)

第2章 位置と環境

小郡市は、中央部を南北に宝満川が流れ、北西部に通称三国丘陵、北東部に花立山（標高130.8 m）から伸びる丘陵があり、南側は緩やかに下る平坦な台地へ移行し、筑後平野へと連なる。

大板井遺跡 29(1)は、宝満川西岸の河岸段丘上の緑辺部に位置し、三国丘陵より伸びた段丘が宝満川の氾濫原に突き出した一角を占める。周辺は、段丘の末端部分に大小の谷が入り組む地形をしており、大板井遺跡の西側には浅い谷を隔てて小郡遺跡・小郡若山遺跡が隣接する。

大板井遺跡は、大正12年(1923)に中山平次郎博士による「石崎さん」の報告に始まり、昭和10年(1935)に鉄道軌道敷きに伴う土取りにより銅戈7口が発見された。本格的な発掘調査は、昭和55年(1980)から始まり、現在までに28回調査が行われている。大板井遺跡といえば、弥生時代中期の拠点集落として評価されており、着々と成果が積み重ねられている。また、小郡官衙遺跡が近隣にあることから、古代の集落に関する成果も蓄積されつつある。以下では、本遺跡の周辺地域に分布する遺跡を中心に歴史的環境の概要を示す。

大板井遺跡周辺において人々の活動が最初に確認されたのは、旧石器時代であり、大板井遺跡6区や小郡中尾遺跡(2)で当時期に該当する石器が出土している。縄文時代になると、早期に小郡中尾遺跡や向築地遺跡(3)、小郡前伏遺跡4区(4)で押型文土器が出土しているが、遺構を伴って人々の活動痕跡を確認できたのは大崎井牟田遺跡の集積層で確認できたのみである。

弥生時代になると、大保横枕遺跡2区(5)で二重環濠を持つ集落が発見され、その時期に前後して大板井遺跡14区・19区・22区を中心に前期中葉～後葉より人々の活動が活発となり、中期には周辺の小郡遺跡・小郡若山遺跡を含めた南北約700 m、東西約1000 mの強大な範囲にわたって集落を築いており、まさに拠点集落の姿を呈している。周辺からは、小郡若山遺跡3区(6)より多鈕細文鏡や、寺福童遺跡4区(7)より銅戈9口が出土しており、大板井遺跡との関連が想定される。後期になると、少し規模は縮小するものの中同期様の場所において、数多くの集落が形成される。特に、小板井屋敷遺跡5区・7区(8)からは、朝鮮半島系の遺物も出土しており、幅広い交流の様子が窺える。

古墳時代には、前期を中心に外来系の土器が多数出土する大崎小園遺跡1区・3区(9)、寺福童遺跡1区(10)があり、他地域との幅広い交流の様子が窺える。

古代には、筑後国御原郡衙に比定される小郡官衙遺跡(11)を中心に、大保道遺跡(12)・小郡前伏遺跡5(13)・向築地遺跡で筑紫平野東西官道(14)が、大板井遺跡10区・小郡前伏遺跡4区では建物群が、小郡前伏遺跡1区(15)・大板井遺跡1区・2区・9区・25区では集落が検出されており、官衙を取り巻く人々の活発な活動の様子が窺える。

中世には大板井区東側を旧筑前街道(16)が通っており、活発な人々の往来があったと考えられる。

江戸時代になると、秋月街道(17)（彦山道(18)）の整備が進むとともに、上町・中町・下町・新町を中心に近世小郡町が形成され、この町を起点に博多道(19)が基山方面へ、大保道(20)が御勢大霊石神社方面へ伸びるなど交通の要所ともなり、活発な活動がなされた。

以上より、大板井遺跡周辺では、弥生時代以降活発な人々の活動が顕著に残る地域であることが分かる。特に、本遺跡の中心となる弥生時代、古代については、1つ1つの調査が新たな歴史を解明する一助となり、今回の調査も重要な成果をもたらしたと言える。



第2図 大板井遺跡 29 周辺遺跡分布図

(S = 1/50,000)

第3章 遺跡の概要

大板井遺跡 29 は、周知の埋蔵文化財包蔵地の中央部西側に相当する。店舗建設部分のみであったため、東西約 15 m、南北約 11 m の非常に狭小な範囲である。遺構検出面の標高は 138 m 前後、現地表から約 0.25 m 下る高さで確認している。出土遺構は、弥生時代の住居跡 3 軒・周溝状遺構 1 基と古代の住居跡 3 軒を確認することができた。本調査区周辺は大板井遺跡の中でも弥生時代や古代の集落としての遺構密度が高い地域にあり、今回の調査により、弥生時代と古代の集落の広がりを確認できたことは、大板井遺跡の集落像を捉えるうえで大きな成果となった。なお、調査区全域において多数のピットを確認したが、掘立柱建物を構成するものは認められなかった。

大板井遺跡 29 で検出した遺構・遺物は以下のとおりである。

●遺構		●遺物			
・住居跡	6 軒 ・溝	1 条	・弥生土器	・土製品	・土師器
・周溝状遺構	1 基 ・土坑	12 基	・石器	・石製品	・須恵器

第4章 遺構と遺物

1. 住居跡【SC】

1号住居跡（第4図・図版1）

調査区中央部南西よりに位置し、倒木痕に切られる。主軸は南北方向で長軸 4.8m × 短軸 4.0m、検出面からの深さは最大 35cm を測る。残存状況は良好である。平面プランは長方形である。床面の中央部に不整形の土坑を持ち、この土坑からは少量だが焼土を確認した。また、ベッド状遺構を含めピットを多数検出した。

北辺全体に幅 12 m、高さ 17 cm、南辺全体に幅 12 m、高さ 19 cm の段掘りで構築したベッド状遺構を検出している。ベッド状遺構上の北辺・南辺や段掘りされたベッド状遺構との境の北辺・南辺の床面からは、細い溝が一部認められる。ベッド状遺構を除く床面全体に黄褐色粘質土で厚さ 2 ~ 6 cm の貼床を施し、貼床下にはピットを数基確認した。内 SC1 P 20 は、直径 30 cm、深さ 30 cm を測り、2 本柱住居の主柱穴のように見える。

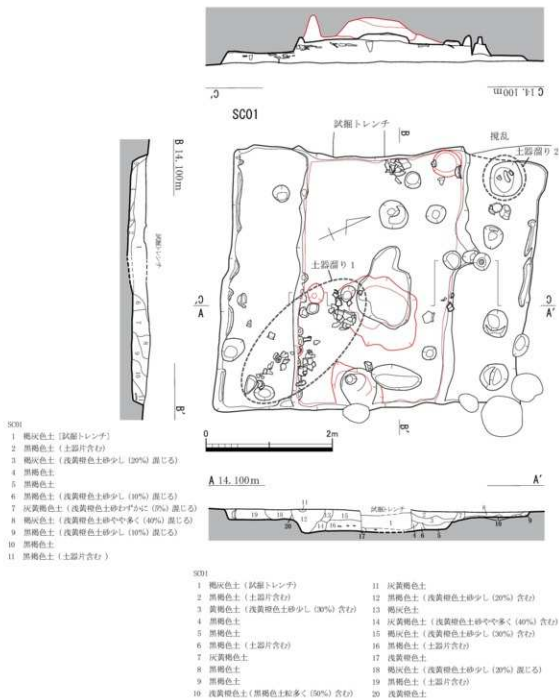
出土遺物は多く、南東隅から中央部（土器溜り①）、西辺、北側ベッド状遺構上の SC1 P 21（土器溜り②）内、特に南東隅から中央部の貼床直上において集中して出土した。図化したもの内、土器溜り①の主な内容は壺 7 点、鉢 1 点、器台 1 点、砥石 1 点、土器溜り②の主な内容は壺 1 点、鉢 1 点、石磨丁 1 点である。これらについては下記「出土遺物」に記載している。瓶の把手や須恵器の坯蓋が数点埋土中より出土しているが、時期的に倒木痕からの混ざりこみと考えられる。

出土遺物（第5～8図・図版5・6）

第5～7図の出土土器は全て弥生土器である。第5図1～13・第6図1・2、第7図7は壺である。第7図7のみ鋤先口縁を呈するが、その他は、頸部はくの字を呈し、底部は平底ややや凸レンズ気味の底の形態を基調としている。よって、第7図7は周辺からの混ざりこみと考えられる。また、第6図1・2のように器高が低く、胴部が球形を呈するものも一部出土しており、第6図1は外面に破裂痕が見られた。第5図6・7は外面に顕著なタタキの痕跡が認められることから、やや新相を呈すると考えられる。第6図3・4は複合口縁壺、5は無頸壺である。3・4は朝顔形に開く頸部に稜線を持つ袋状口縁を持つが、3は口縁部上半が逆くの字のように内側にすぼまるのに対し、4は口縁部上半がやや直立気味である。5の口縁部は素口縁で、胴部から口縁部に向かってすぼまっており、第7図7と同様に周辺からの混ざりこみと考えられる。第6図6～10は鉢である。口縁部形態は、6・7はくの字口縁、8～10は素口縁である。7は内外面に被熱痕が見られ、外面にはコゲも付着していた。6・8は底部が丸底に近く、外面にタタキ調整が施されていることから、やや新相を呈すると考えられる。10は底部に焼成前に外面から内面に向かって穿孔したと考えられる穴が1箇所確認できた。第7図1は高杯である。外面と内面裾部付近に赤色顔料が塗られている。第7図2～6は器台である。外面にハケメ調整を施すものが多く見られる中で、6は外面にタタキ調整が施されていることから、やや新相を呈すると考



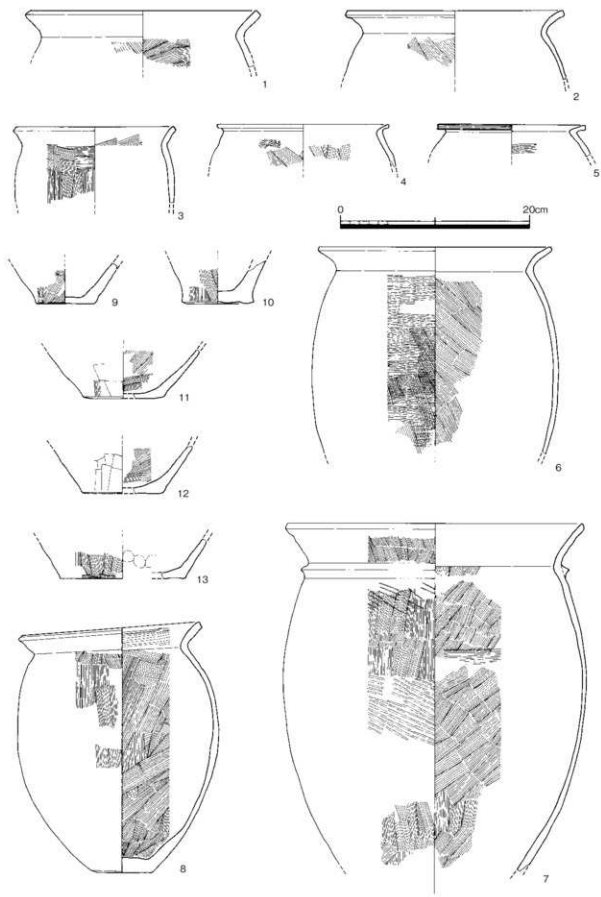




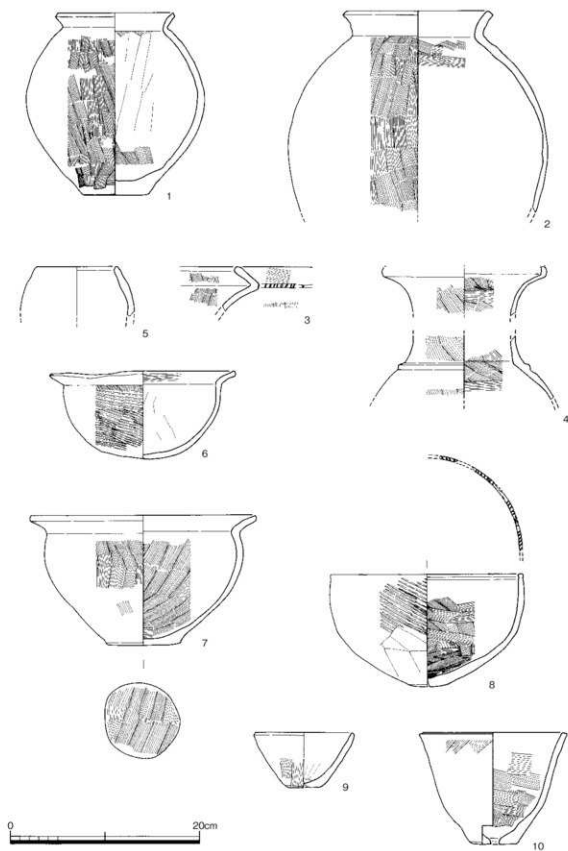
第4図 1号住居跡実測図 (S=1/60)

えられる。第7図8～10は支脚である。粘土塊を粗雑に接合して形成しており、且つ、被熱を受けているため、非常にもろい。外面には、無作為に削った痕跡なのか、細い凹みを多数確認できた。第8図1～3は磨製石庖丁である。1～3は約1/2～1/3を欠損するが、外湾刃半月形と推測できる両刃であり、穿孔は2箇所認められた。特に、2は赤紫色をした石材であり、立岩産石庖丁(輝緑凝灰岩)として流通していたとされる系統のものと考えられる。第8図4は石製の勾玉の未成品であり、北西部分の埋土より出土した。表裏ともに研磨痕が見られる。第8図5は投彈である。第8図6は砥石であり、砥面を4面確認できた。

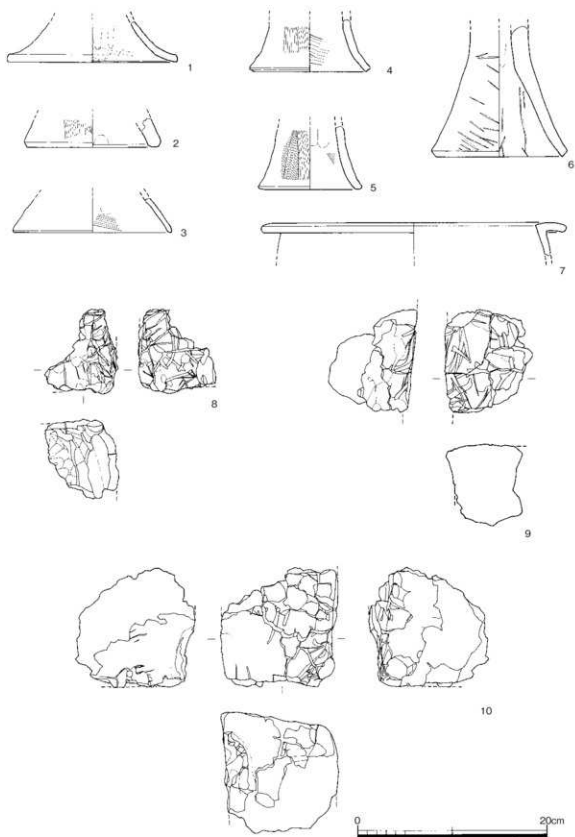
上記の形態的特徴より、第6図5・第7図7は弥生時代中期後半の様相を呈すると考えられる。しかし、総じて弥生時代後期後半(下大限式段階)を中心とした一群であることから、この時期が住居跡を営んでいた時期に相当すると考えられる。なお、第5図6・7、第6図6・8、第7図6はこの一群の中でもやや新相を呈すると考えられる。



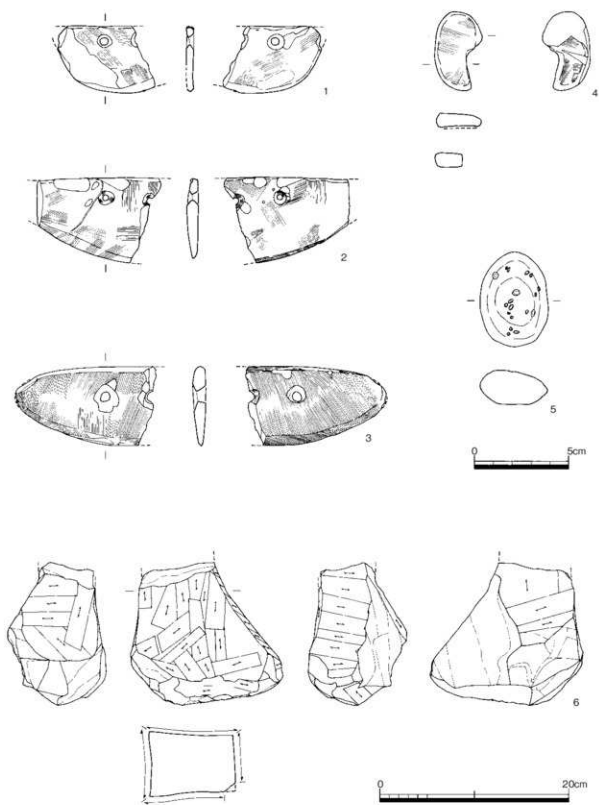
第5图 1号住居跡出土遺物实测图① (S = 1/4)



第6图 1号住居跡出土遺物実測図② (S=1/4)



第7図 1号住居跡出土遺物実測図③ (S = 1/4)



第8图 1号住居跡出土遺物実測図④ (1~5 : S=1/2、6 : S=1/4)

なお、実測図に掲載した土器の内、第5図1・3・6・8・9、第6図1・9・10、第8図6は土器溜り①から、第5図4、第8図2は土器溜り②から出土している。また、第4図に示した遺物出土状況図の中で、第5図7は西辺の土器溜りから、第6図6は南辺中央部の土層ベルトを切っているライン付近から、第6図7は土器溜り②の東隣の土器溜りから出土している。

2号住居跡（第9図、図版2）

調査区北西端部よりに位置し、3号住居跡と7号住居跡を切り、遺構の大部分が調査区外へ延びる。遺構の大きさは、現状で長軸3.75m×短軸0.8m、検出面からの深さは最大10cmを測る。遺構は、後世の造成によりほとんど残存しておらず、遺構に伴うピット・土坑等の施設も確認されていない。また貼床も認められない。

出土遺物は、土師器を中心に少量出土したが、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物（第13図）

1は土師器の甕である。口縁部はゆるやかに反し、口縁部内面の稜は不明瞭である。胴部内面には頸部屈曲部付近までヘラ削りが施されている。

3号住居跡（第9図、図版2）

調査区北西端部よりに位置し、2号住居跡と7号住居跡に切られ、遺構の大部分が調査区外へ延びる。当初、7号住居跡を切っていると想定して掘ったため、遺構番号が7号住居跡と前後してしまった。遺構の大きさは、現状で長軸2.15m×短軸0.6m、検出面からの深さは最大41cmを測り、壁高は20cmと考えられる。遺構に伴うピット・土坑等の施設は確認されていない。また貼床も認められない。

出土遺物は、弥生土器片を中心に少量出土したが、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物（第13図、図版7）

2は弥生土器の手捏ね土器である。ナデ調整で形成され、外面に黒斑が見られる。

5号住居跡（第10図、図版2）

調査区中央部東よりに位置する。1号溝・6号土坑・7号土坑に切られ、2号土坑・9号土坑を切る。主軸は南北方向で長軸4.35m×短軸3.3m、検出面からの深さは最大5cmを測る。後世の削平によりほとんど残存していない。平面プランは長方形である。

壁面の北辺中央部にはカマドが設置されていた。残存状況は非常に悪く、袖部は残存しておらず、焼土が散在していた。

床面には貼床が施されている。床面全体に黄褐色粘質土で厚さ5～15cmを測る。貼床を完全に除去した後に、その下位でピットが12か所確認された。内SC5 P 2・SC5 P 5・SC5 P 6は、直径30～40cm、深さ30～60cmを測る。4本柱住居の主柱穴のように見えるが、SC5 P 6は比較的浅いため、主柱穴になるかどうかは不明である。

出土遺物は少なく、遺構全体から出土している。時期的にこの住居跡に伴うものと考えられる。

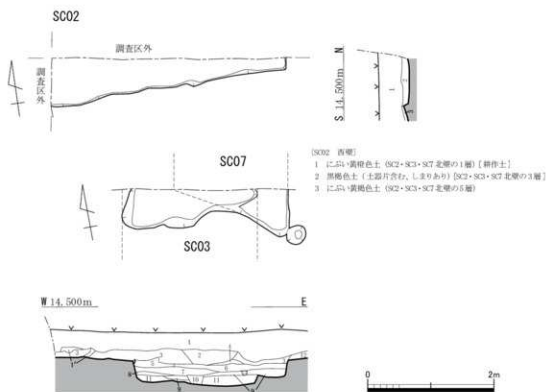
出土遺物（第13図、図版7）

3～5は須恵器、6～9は土師器である。3～5は坏身である。ほぼ直線的に伸びる体部に、4・5は体部と底部の境が丸味を持つことから、高台付坏である可能性も考えられよう。6・7は坏である。ゆるく外反する体部に、体部と底部との境は、丸味を呈する。底部切り離し調整は7のみ確認でき、ヘラ削りが施されていた。8・9は小形甕である。伴に口縁部内面の稜は明瞭である。8は胴部の厚さに対して2倍もありそうな肥厚した口縁部が短く外湾し、9は口縁部を短く、端部を丸く仕上げている。

上記の形態的特徴より、8世紀後半の様相を呈すると考えられる。

6号住居跡（第11図、図版2）

調査区南西隅に位置し、一部が調査区外へ延びる。遺構はところどころ攪乱により切られているが、遺構の大きさは、現状で長軸2.4m×短軸1.45m、遺構検出時に少し上面を飛ばしてしまっ



第9図 2号・3号・7号住居跡実測図 (S=1/60)

だが、検出面からの深さは土層より最大10cmを測る。遺構に伴うピットを3基確認しているが、矮小なため何らかの施設であったかどうかは不明である。貼床は認められない。

出土遺物は、弥生土器が数点出土したが、小片の為図化するに至ったものは少ない。

出土遺物 (第13図)

10・11は弥生土器である。10は甕の口縁部の小片である。頸部がくの字を呈し、外面には頸部から胴部にかけてハケメ調整が施されている。11は複合口縁壺の口縁部の小片である。稜線をもつ袋状口縁であり、口縁部上半は逆くの字のように内側にすままる。

上記の形態的特徴より、弥生時代後期後半の様相を呈すると考えられる。

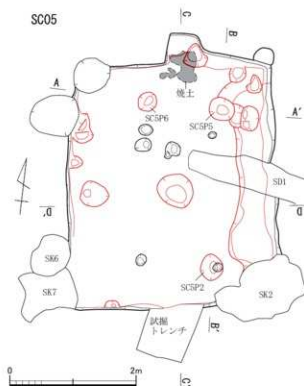
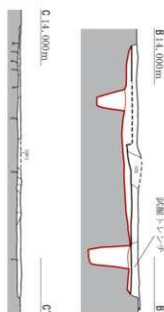
7号住居跡 (第9図、図版2)

調査区北西端部よりに位置し、2号住居跡に切られ、3号住居跡を切り、一部が調査区外へ延びる。当初、3号住居跡に切られていると想定して掘ったため、遺構番号が3号住居跡と前後してしまった。遺構の大きさは、現状で長軸1.9m×短軸0.75m、検出面からの深さは最大27cmを測り、壁高は20cmと考えられる。遺構に伴う柱穴と考えられる直径25cm、深さ15cmのピットが、壁面の土層【SC02・SC03・SC07北壁土層10層】で確認できた。貼床は認められない。

出土遺物は土師器の小片を数点確認しており、時期的にこの住居に伴うものと考えられる。

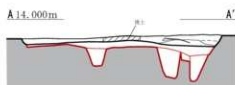
【SC05 東西ベレト】

- 1 褐色土 (試掘トレンチ)
- 2 黒褐色土 (シルト)
- 2 褐色土 (明黄褐色土較少し (10%) 含む, シルト)
- 3 褐色土



【SC05 南北ベレト】

- 1 褐色土 (試掘トレンチ)
- 2 黒褐色土 (明黄褐色土較少し (10%) 含む)
- 3 黒褐色土
- 4 褐色土
- 5 褐色土 (明黄褐色土較少し (10%) 含む)
- 6 褐色土
- 7 灰黄褐色土 (棕色の塊土少し (30%) 含む) [カマ]



第10図 5号住居跡実測図 (S = 1/60)

出土遺物 (第13図、図版7)

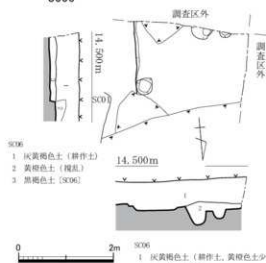
12・13は土師器、14は弥生土器である。12は甕の口縁部の小片であり、ゆるやかに外反する口縁部に、口縁部内面の稜は不明瞭である。13は胴部上半がわずかにすぼみ、外反する短い口縁部がつく。口縁部内面の稜は不明瞭である。14は器台である。内面側が剥離しているが、現状でも器壁が厚い。3号住居跡からの混ざり込みの可能性が考えられる。

2. 周溝状遺構【SV】

1号周溝状遺構 (第12図、図版3)

調査区の南東隅に位置し、1号土坑・4号土坑を切る。内径17m、外形28m程度の正円系を呈すると思われる周溝状遺構で

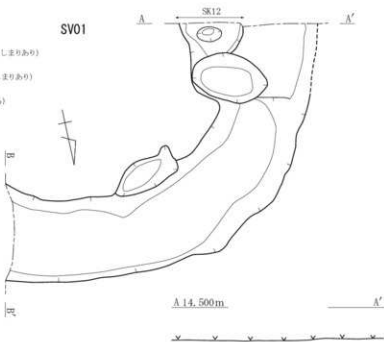
SC06



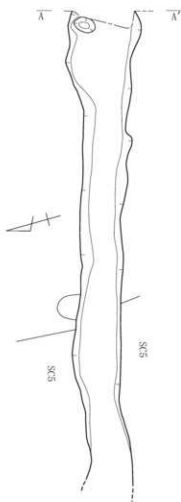
第11図 6号住居跡実測図 (S = 1/80)

【SV01: 実測】

- 1' に近い黄褐色土（耕作土）
 1 褐色土（明黄褐色土少し（10%）混じる、しまりあり）
 2 黒褐色土（しまりあり）
 3 褐色土（明黄褐色土少し（10%）含む、しまりあり）
 4 黒褐色土（しまりあり）
 5 明黄褐色砂（褐色土砂や中多く（50%）混じる）



SD01

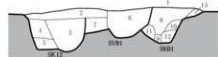


A 14,400m A'



【SD01: 実測】

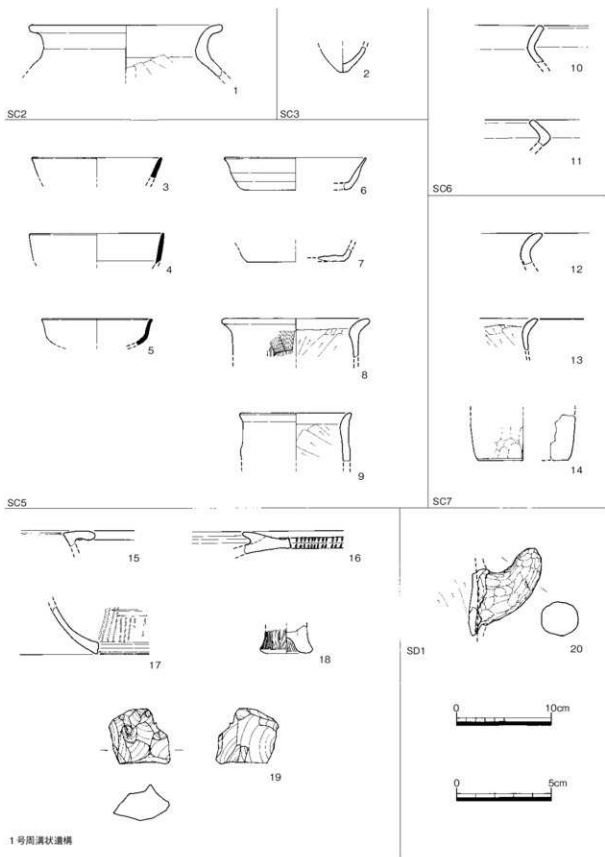
- 1' に近い黄褐色土〔耕作土〕
 1 褐色土（土器片含む）
 2 褐色土（上部より明るい色）
 3 黒褐色土
 4 に近い黄褐色土（ビットの痕跡）
 東西端にくにしたがって薄くなる



【SV01・SK01・SK12 実測】

- 1 に近い黄褐色土（耕作土）
 2 褐色土（しまりあり）
 3 褐色土（しまりあり）
 4 褐色土（しまりあり）
 5 黒褐色土（しまりあり）
 6 黒褐色土（SV01の境土、SK01を切る、しまりあり）（SV01）
 7 黒褐色土（しまりあり）（SV01）
 8 黒褐色土（しまりあり）
 9 褐色土（しまりあり）
 10 黒褐色土（しまりあり）
 11 黒褐色土（しまりあり）
 12 に近い褐色土（しまりあり）
 13 褐色土（しまりあり）

第12図 1号周溝状遺構、1号溝実測図（S = 1/60）



第13図 2号・3号・5号・6号・7号住居跡、1号周溝状遺構、1号溝出土遺物実測図
 (19: S = 1/2、その他: S = 1/4)

ある。溝幅10cm、深さ53cmを測る。断面は逆台形を呈し、遺構底面はほぼ平坦となる。周溝状遺構の内部には、ピットを6基礎認しているが、溝と一連の遺構を構成すると考えられる遺構はみあたらなかった。

埋土から少量の弥生土器や石器が出土しているが、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物 (第13図)

15～18は弥生土器である。15は甕の口縁部小片であり、口縁部が鋤先口縁を呈している。16は広口壺の口縁部小片であり、口縁部が鋤先口縁を呈するとともに、外面の口縁端部に刻目が施され、赤色顔料が塗られている。17は筒型器台の裾部小片である。外面に単位をもたない暗文が描かれ、内外面ともに赤色顔料が塗られている。18はミニチュア土器の器台である。19は黒曜石の石核である。

上記の形態的特徴より、弥生時代中期後半(須玖I新段階)に相当すると考えられる。

3. 溝【SD】

1号溝 (第12図、図版3)

調査区の東側に位置し、5号住居跡と5号土坑を切る。東辺中央部から中央部方向に徐々に浅くなりながら伸びる溝であり、5号住居跡を切った後、削平を受け途切れる。現状で全長約48m、幅50～100cm、深さ最大50cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は、水平堆積の様相を示す。

埋土から少量の遺物が出土しているが、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物 (第13図、図版7)

20は土師器の瓶の把手である。粗いナデ調整で整形し、外面はヘラ削りが施されている。

4. 土坑【SK】

1号土坑 (第14図、図版3)

調査区の南東隅において検出した土坑であり、1号周溝状遺構に切られ、一部が調査区外へ伸びる。平面形は、現状100cm×80cmの楕円形を呈し、深さは最大80cmを測る。西側方向に向かって深く掘り込まれている。

遺物は土器の小片が数点出土したのみであり、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物 (第18図)

1は弥生土器の甕の底部小片であり、底面は平底を呈している。

2号土坑 (第14図、図版3)

調査区の南東部において検出した土坑である。遺構検出当初は、5号住居跡を切ると考えていたが、出土遺物より、5号住居跡に切られていることが分かった。遺構の平面形は、135cm×140cmの円形を呈し、深さは最大85cmを測る。東側方向に向かって深く掘り込まれている。

遺物は土器の小片が数点出土したのみであり、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物 (第18図)

2は弥生土器の筒型器台の裾部小片である。外面はハケメ後ヘラミガキが施されている。

3号土坑 (第15図、図版3)

調査区の南東部において検出した土坑である。平面形は、110cm×70cmの楕円形を呈し、深さは最大65cmを測る。西側方向に向かって深く掘り込まれている。

遺物は土器の小片が数点出土したのみであり、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物 (第18図)

3・4は弥生土器である。3は甕の底部小片である。4は筒型器台の口縁部小片であり、外面はヨコナデ後暗文を意図したようなヘラミガキが施されている。

4号土坑 (第15図、図版4)

調査区の南東隅において検出した土坑であり、1号周溝状遺構に切られる。平面形は、130cm×110cmの楕円形を呈し、深さは最大90cmを測る。南側方向に向かって深く掘り込まれている。

遺物は弥生土器の小片が数点出土したのみであり、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物 (第18図)

5～7は弥生土器である。5・6は甕の口縁部小片で、口縁部は鋤先口縁を呈する。7は壺の胴部片である。外面には、突帯1条が巡っており、その突帯端部には刻目が施されている。

5号土坑 (第16図、図版4)

調査区の東辺中央部において検出した土坑であり、1号溝に切れ、一部が調査区外へ延びる。平面形は、現状125cm×105cmの楕円形を呈し、深さは最大80cmを測る。土坑の北側より中央部には直径30cm、深さ25cmのピットが掘り込まれている。

遺物は弥生土器の小片が数点出土したのみであり、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物 (第18図、図版7)

8は弥生土器の器台の裾部片である。器壁の厚い体部に、外面は粗雑にナデ調整が施されている。

6号土坑 (第16図、図版4)

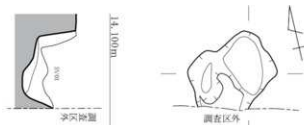
調査区の中央部南側よりにおいて検出した土坑であり、7号土坑を切る。平面形は、60cm×60cmの円形を呈し、深さは最大90cmを測る。南西方向に向かって深く掘り込まれている。

遺物は土師器の小片が数点出土したのみであり、図化するに至ったものは少ない。

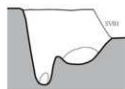
出土遺物 (第18図、図版8)

9～11は土師器である。9は坏である。直線的に伸びる体部に、体部と底部との境は丸味を帯びており、底部はヘラ切りが施されている。10は小形甕である。内外面ハケメ調整が施されているが、口縁部内面の稜は明瞭である。11は壺の底部片である。外面がヘラ削り、内面は回転ナデ、底部は回転ヘラ削りが施されている。

SK01

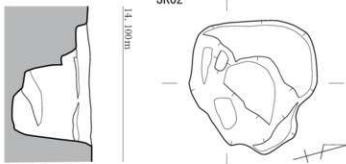


14.100m



0 2m

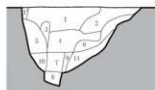
SK02



【SK02 南北へみた】

- 1' 褐色土 (浅黄色土砂少し (10%) 含む)
- 1 黒褐色土 (非常に硬くしまりあり、浅黄色土砂少し (10%) 含む)
- 2 黒褐色土 (非常に硬くしまりあり、浅黄色土砂少し (10%) 含む)
- 3 明黄褐色土 (非常に硬くしまりあり)
- 4 黒褐色土 (非常に硬くしまりあり、浅黄色土砂少し (10%) 含む)
- 5 黒褐色土 (非常に硬くしまりあり)
- 6 黒褐色土 (非常に硬くしまりあり、浅黄色土砂少し (10%) 含む)
- 7 黒褐色土 (非常に硬くしまりあり)
- 8 黒褐色土 (非常に硬くしまりあり)
- 9 黒褐色土 (非常に硬くしまりあり)
- 10 明黄褐色砂
- 11 褐色土砂

14.100m



第14図 1号・2号土坑実測図 (S=1/40)

7号土坑 (第16図、図版4)

調査区の中央部南側よりにおいて検出した土坑であり、6号・8号土坑に切られる。平面形は、70cm×90cmの楕円形を呈し、西側に35cm伸びたピットを持つ。深さは最大75cmを測る。

遺物は土師器の小片が数点出土したのみであり、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物 (第18図)

12は土師器の甕の口縁部片である。口縁部内面の稜は明瞭であり、内面胴部にはヘラ削りが施されている。

8号土坑 (第16図、図版4)

調査区の中央部南側よりにおいて検出した土坑であり、7号土坑を切る。平面形は、105cm×85cmの楕円形を呈し、深さは最大85cmを測る。

遺物は土師器の小片が数点出土したのみであり、図化するに至ったものは少ない。

出土遺物 (第18図、図版8)

13・14・16は土師器、15は須恵器である。13・14は坏であり、直線的に伸びる体部に、体部と底部との境は丸味を帯びており、底部はヘラ削りが施されている。15は壺の底部片である。外面がヘラ削り、内面は回転ナデ、底部は回転ヘラ削りが施されている。16は甕の口縁部～胴部片である。外湾するくの字口縁に、口縁部内面の稜は明瞭である。

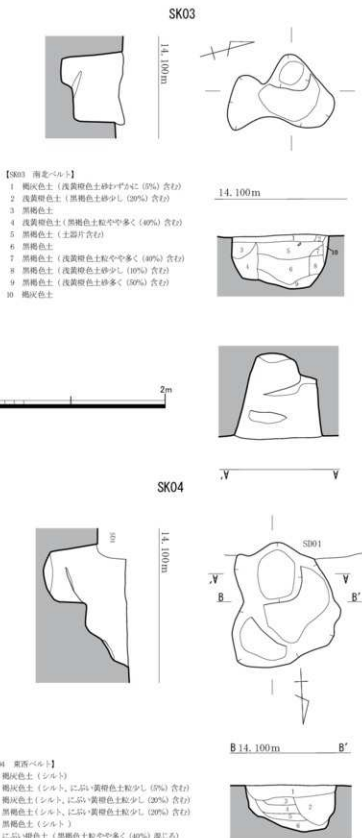
9号土坑 (第17図、図版4)

調査区の中央部南側よりにおいて検出した土坑であり、5号住居跡・6号土坑に切られる。平面形は、115cm×70cmの楕円形を呈し、深さは最大80cmを測る。

遺物は土師器の小片が数点出土したのみであるが、図化するに至ったものは少ない。

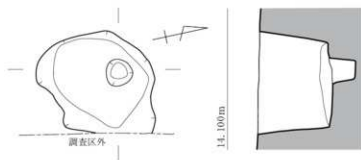
出土遺物 (第18図)

17は須恵器の坏蓋のつまみ部分である。外面頂部には十字に丸を表した墨書が描かれている。

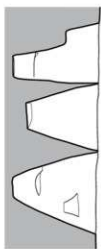
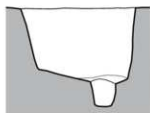


第15図 3号・4号土坑実測図 (S = 1/40)

SK05

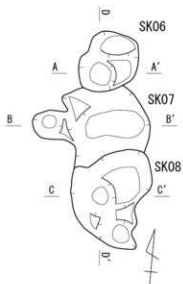


14.100m



D 14.100m

D'



A 14.100m A'



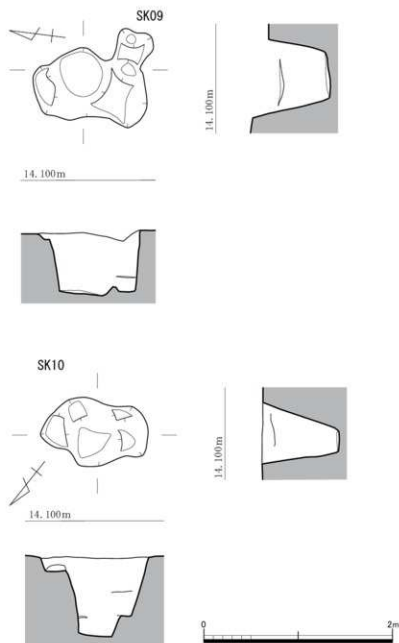
B 14.100m B'



C 14.100m C'



第16图 5号·6号·7号·8号土坑实测图 (S = 1/40)



第17図 9号・10号土坑実測図 (S = 1/40)

10号土坑 (第17図、図版4)

調査区の南辺中央部において検出した土坑である。平面形は、115cm×70cmの楕円形を呈し、深さは最大80cmを測る。中央部に向かって深く掘り込まれている。

遺物は土器の小片が数点出土したのみであり、図化するに至ったものは少ない。

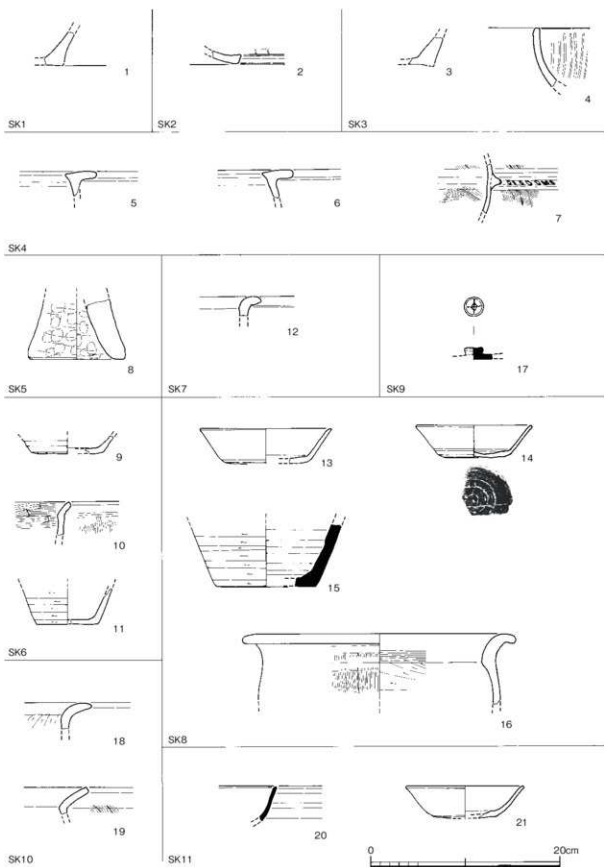
出土遺物 (第18図)

18は土師器の甕の口縁部片である。外反する短い口縁部に、口縁部内面の稜は不明瞭である。19は弥生土器の甕の口縁部片である。頸部はくの字を呈する。

11号土坑 (第3図)

調査区の中央部において検出した土坑であり、ピットに切られる。平面形は、115cm×80cmの楕円形を呈し、深さは最大70cmを測る。

遺物は土師器の小片が数点出土したのみであり、図化するに至ったものは少ない。



第 18 図 土坑出土遺物実測図 (S = 1/4)

出土遺物（第18図、図版8）

20は須恵器の坏の小片である。ほぼ直線的に伸びる体部に、体部と底部の境が丸味を持つことから、高台付坏である可能性も考えられよう。21は土師器の坏である。直線的に伸びる体部に、体部と底部の境は丸味を帯び、外面底部には回転ヘラ切りの後ナテ調整が施されている。

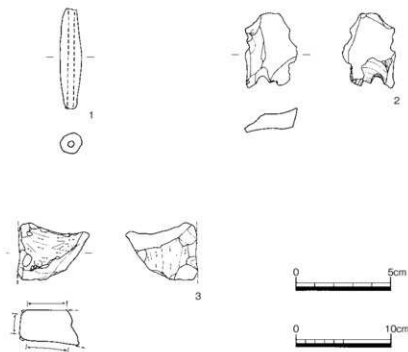
5. ビット【P】

調査区全域において多数のビットを確認した。その内、遺物が出土したビットは103基存在し、時代も弥生時代を一部含むものの、多くは遺物を伴って検出した遺構と同様の時期である8世紀前半～後半が多い。図化するに至ったものは少ない。以下では、図化できた出土遺物について記す。

出土遺物（第19・20図、図版7・8）

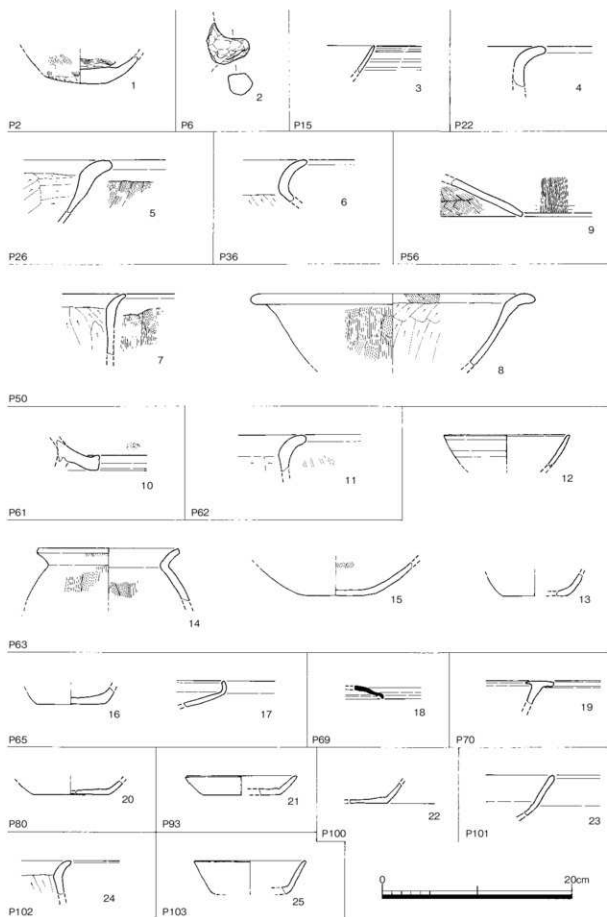
まず、第19図より記す。1はP63から出土した土錘である。工具で面を取りながら丸く仕上げている。2はP48から出土した黒曜石製の石鏃未製品である。3はP78から出土した砥石であり、現状で砥面を3面確認している。

次に、第20図について記す。1はP2から出土した弥生土器の甕の底部片である。底部は丸底である。2はP6から出土した土師器の把手である。手捏ね後ナテ調整が施されている。3はP15から出土した土師器の坏である。直線的に伸びる体部に内外面回転ナテが施されている。4はP22から出土した土師器の甕の口縁部片である。ゆるやかに外反する口縁部に、口縁部内面の稜が不明瞭である。5はP26から出土した土師器の鉢の口縁部片である。肥厚した口縁部が短く外湾し、口縁部内面の稜は明瞭である。6はP36から出土した土師器の甕の口縁部片である。ゆるやかに外反する口縁部に、口縁部内面の稜がやや明瞭である。7・8はP50から出土した土師器である。7は小形甕の口縁部～胴部片であり、直線的に伸びる胴部に、ゆるやかに口縁部は外反、口縁部内面の稜は明瞭である。8は鉢である。肥厚した口縁部が短く外湾し、口



第19図 ビット出土遺物実測図①（1・2：S=1/2、3：S=1/4）

縁部内面の稜が明瞭である。9はP 56から出土した弥生土器の高杯の裾部片である。外面には赤色顔料が施されている。10はP 61から出土した弥生土器の筒型器台の裾部片である。外面には赤色顔料が施されている。11はP 62から出土した土師器の甕の口縁部片である。ゆるやかに外反する口縁部に、口縁部内面の稜が明瞭である。12～15はP 63から出土しており、14は弥生土器、それ以外は土師器である。12・13は坏であり、直線的に伸びる体部に、13は体部と底部の境がシャープで、底部外面はヘラ切りが施されている。14は甕の口縁部片であり、頸部はくの字を呈する。内外面ともにハケメ調整が施されている。15は壺の底部片であり、外面に黒斑が見られる。16・17はP 65から出土した土師器である。16は壺の底部片であり、内外面回転ナダ、底部にヘラ切りが施されている。17は坏の小片であり、口縁部付近で内湾するが、体部中位で稜をもって立ち上がる。18はP 69から出土した須恵器の坏蓋であり、口縁端部を折り返している。19はP 70から出土した弥生土器の甕の口縁部片であり、口縁部は鋤先口縁を呈する。20・21・22は外面底部にヘラ切りが施された土師器の坏であり、20はP 80から、21はP 93から、22はP 100から出土した。23はP 101から出土した弥生土器の高杯の杯部片である。24はP 102から出土した土師器の甕の口縁部片である。ゆるやかに外反する口縁部に、口縁部内面の稜が不明瞭である。25はP 103から出土した土師器の坏であり、直線的な体部に、やや丸みを帯びた体部と底部との境を呈する。



第 20 図 ビット出土遺物実測図② (S = 1/4)

第5章 まとめ

今回の調査で検出した遺跡に対して評価をするにあたり、まず、各遺構の時期的変遷についてまとめたい。大板井遺跡は、これまで28回調査が行われてきたが、その成果の多くは今回の調査区同様に掘集落としての姿を見せる弥生時代と小郡官衙機能前後に相当する古代にかけての時期であり、今回発見した遺構も多くは同様の時期に相当すると考えられる。今回の調査を評価する上でも、周辺の発掘調査区との遺跡動態を検討することは、今後の地域の歴史説明を行う上で大きな成果となり得るので、今回の調査区周辺を中心に遺跡動態について考察を行いたい。

1. 大板井遺跡29の遺構の時期とその変遷について

今回の調査で検出した遺構のうち、遺構の切り合い関係や出土遺物より時期が明確なものは、以下のとおりである。なお、今回の調査では、遺構の切り合い関係のみにより時期を特定したものは見当たらなかった。

弥生時代中期中葉：4号土坑、P 70

中期後半：1号周溝状遺構、3号土坑、

中期中葉～後半：1号土坑、2号土坑、P 56、P 61

後期後半：1号住居跡、3号住居跡、6号住居跡、5号土坑、
P 2、P 101

7世紀後半：2号住居跡、7号住居跡、7号土坑、9号土坑、10号土坑、
P 22、P 36、P 63、P 102

8世紀前半：P 62、P 65、P 69

8世紀中頃：5号住居跡、6号土坑、8号土坑、11号土坑、P 103

8世紀後半：P 15、P 26、P 50、P 93

古 代：1号溝（5号住居跡より新しい）、P 6

次に、今回の調査区の遺構変遷を時代順に追うと、第21図の通りとなる。まず、弥生時代中期中葉（須玖Ⅰ式段階）で、調査区南東隅を中心に土坑が広がっている。やや規則性を持って直線的に並ぶため、掘立柱建物となりうるか検討をしたが、桁と行の軸線が直角に交わらないものが多く判然としないため、現時点では掘立柱建物は未確認と判断した。中期後半（須玖Ⅱ式古段階）には、1号周溝状遺構が築かれる。大板井遺跡では、これまでに確認された周溝状遺構は、I区の後期初頭（高三瀬段階）に比定できるもののみであり、今回が2例目となる。

大板井遺跡においては、続く後期初頭～前半にかけての人々の活動痕跡はこれまでほとんど確認されてきていないが、後期後半になると突如、住居跡が多数築かれる傾向にある。本遺跡でも、当時期に比定できる住居跡を調査区西側で3軒確認している。その内、1号住居跡は、一部古代の掘り込みで崩されているものの、非常に多くの良好な土器群が出土しており、この時期の一括資料と成り得る。

大板井遺跡の包蔵地内における古墳時代前半における人々の活動については判然としていないが、続く7世紀後半から突如人々の活発な活動が検出されている。今回の調査区でも、7世紀後半以降～8世紀中頃を中心に8世紀後半まで人々の活動痕跡を確認している。7世紀後半には、調査区北西隅に住居跡が2軒（新：2号住居跡→古：7号住居跡）、あまり時期をおかずに検出していることから、建て替えの可能性が想定される。また、8世紀中頃に比定できる5号住居跡は、遺構検出面からの堆積層が非常に浅いためカマドも焼土しか検出できなかったが、出土したわずかな遺物から時期比定ができた。

今回の調査区は、矮小ではあったが、大板井遺跡を代表する弥生時代と古代の遺構を確認することができ、大きな成果となった。しかし、調査区の歴史的評価だけでは、地域の歴史復元には至らない。よって、次の項で、今回検出した弥生時代と古代に着目し、今回の調査区周辺における発掘調査成果について整理し、考察を行うこととする。

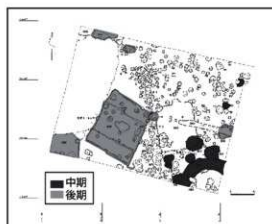
2. 大板井遺跡 29 周辺の遺跡動態

以下では、今回の調査区で特に遺構を数多く検出できた、弥生時代中期中葉～後期後半と7世紀後半～8世紀後半に時期区分し、考察することとする。なお、本調査区周辺において実施された調査地検出遺構の動態については、大板井遺跡 25（市報告第 279 集）において時代別の遺構配置状況が図示されていることから、本稿では、個別の遺構変遷状況は省き、大板井遺跡全体とその周辺に広がる遺跡との関係について論じることとする。

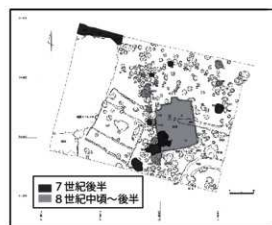
1) 弥生時代中期中葉～後期後半

弥生時代における、大板井遺跡の各調査区の消長は表 1 のとおりである。前期中葉～後葉に大板井遺跡包蔵地内の東部・南部を中心に住居跡や貯蔵穴、土坑を中心とした集落が形成され始める。近年では、大板井遺跡包蔵地内西部において土坑が確認されている。大板井遺跡の西隣に隣接する小郡遺跡では前期の貯蔵穴群が検出されていることから、谷を挟んだ東西の丘陵上には、食糧庫が築かれていたと考えられる。

中期になると、集落規模が飛躍的に拡大し、大板井遺跡包蔵地内全域において人々の活動痕跡が検出できる。特に、須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階にかけて盛行しており、本調査区が位置する大板井遺跡包蔵地内西部を中心に数多くの遺構が検出されている。特に、市史補遺編をまとめるにあたって過去の調査事例を再検証していた際、1区で指摘されていた環濠が第 22 図のようにめぐる可能性を指摘でき、特に、この環濠内に大板井遺跡を代表する祭祀土坑や直径約 11m の大型円形住居 3 軒が集中して検出できたことは特筆にあたる。小郡遺跡でも大板井遺跡と類する大型円形住居が検出され、その西隣の小郡若山遺跡では一辺約 6m の長方形住居や多鈕細文鏡が出土している。また、これらの集落域の北側には、墓域が形成されている。このことから、各遺跡の大型住居を中心に少なくとも 3 つの集団でこれら 3 遺跡はクニを形成していた可能性が想定される。ま



< 弥生時代 >



< 7世紀後半～8世紀後半 >

第 21 図 大板井遺跡 29 の遺構変遷図 (S = 1/320)

第 1 表 大板井遺跡における弥生時代の消長

調査地点	前期前半	前期後半	中期中葉	中期中葉	中期中葉	後期中葉	後期中葉	後期中葉	後期中葉
1区遺構									
2区遺構									
3区遺構									
4区遺構									
5区遺構									
6区遺構									
7区遺構									
8区遺構									
9区遺構									
10区遺構									
11区遺構									
12区遺構									
13区遺構									
14区遺構									
15区遺構									
16区遺構									
17区遺構									
18区遺構									
19区遺構									
20区遺構									
21区遺構									
22区遺構									
23区遺構									
24区遺構									
25区遺構									
26区遺構									
27区遺構									
28区遺構									
29区遺構									
30区遺構									
31区遺構									
32区遺構									
33区遺構									
34区遺構									
35区遺構									
36区遺構									
37区遺構									
38区遺構									
39区遺構									
40区遺構									
41区遺構									
42区遺構									
43区遺構									
44区遺構									
45区遺構									
46区遺構									
47区遺構									
48区遺構									
49区遺構									
50区遺構									

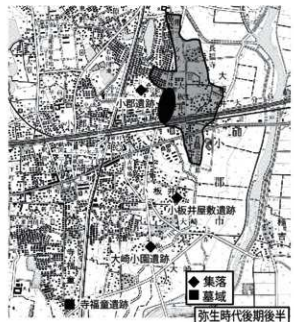
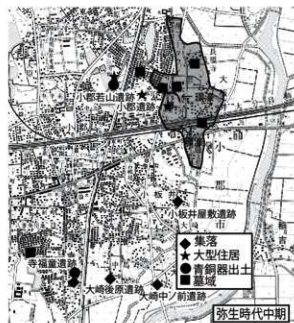
た、この時期には、大板井遺跡の南側にも数多くの遺跡が広がっており、集落域を検出した大崎中ノ前遺跡、大溝や井戸を検出した大崎後原遺跡、集落域と祭祀土坑が多数出土した小板井屋敷遺跡、墓域や銅戈9口を発見した寺福童遺跡が存在し、拠点集落と其の周辺の集落との関係など、今後検討すべき課題が多々存在する。

後期前半にはほとんど遺構を確認できていないものの、後半になると本調査区を中心とした大板井遺跡包蔵地内西部においてベッド状遺構をもつ住居跡が密集して築かれている。小郡遺跡でも同様な住居跡が確認されるとともに、それらを包蔵するように環濠の存在も指摘されている。この時期の大板井遺跡の南側では、朝鮮半島系土器が出土している小板井屋敷遺跡で多数の住居跡が検出される。そして、後期終末～古墳時代初頭にかけては、畿内系土器が多数出土した大崎小園遺跡や方形周溝墓が検出された寺福童遺跡など、他地域からの文化を受容しながら大変盛行する地域と考えられる。

2) 7世紀後半～8世紀後半

7世紀後半～8世紀後半における大板井遺跡周辺では、小郡官衙〔小郡官衙第I期（7世紀中頃～後半）・第II期（7世紀末～8世紀前半）・第III期（8世紀中頃～後半）〕が機能しており、小郡官衙に関する研究が深化しつつある現在において、官衙機能時期における周辺の遺跡動態を整理することは、今回の調査を評価する上で大きな成果となり得ると考える。各時期における遺跡動向を論ずる前に、大板井遺跡の集落動態をまとめると6世紀後半以降に拠点的な集落形成が開始され7世紀後半～8世紀前半を中心に小郡遺跡との間の細い谷間に沿って住居跡が営まれていたことが判明している。以上を踏まえて、小郡官衙機能段階の区分に応じて、遺跡動態を考察したい。

まず、小郡官衙第I期（7世紀中頃～後半）である。この時期には、大板井遺跡18区で検出された整地層がある。北



第22図 大板井遺跡周辺の遺跡分布図 (S=1/35,000)

東側に緩やかに傾斜した旧地形を盛土し、平坦面を造成したもので、出土遺物より下限7世紀前半代である。この整地層のすぐ西隣では総柱建物群が検出されており、建物方位の近似性や規模より、小郡官衙第Ⅱ期に併行すると考えられているが、整地層が大板井遺跡10区で検出された総柱建物群建設に伴う土地の平坦部拡張を意図したものである場合、総柱建物群は上限7世紀前半代まで遡る可能性が指摘されている。この時期の周辺遺跡の動向を概観すると、小郡若山遺跡・向築地遺跡・小郡前伏遺跡では7世紀初頭より集落が継続して営まれ始める。本遺跡より南側の小板井屋敷遺跡でも7世紀前半の建物が検出されており、広い範囲で人々の活発な活動が行われていた時期と言える。

次に、小郡官衙第Ⅱ期（7世紀末～8世紀前半）である。この時期は、正北位から約45度西に傾いて庁舎や倉庫・溝などが整然と造られた御原郡衙に比定される小郡官衙建物群が機能していた時期である。この郡衙に関連する建物として大板井遺跡10区の総柱建物群がある。また、小郡前伏遺跡では、郡庁城の建物群の中心に向かう道路が検出されており、交通網も発達していたことが分かる。この時期の周辺集落の動態は、小郡官衙第Ⅰ期とはほぼ変化は見られない。

最後に、小郡官衙第Ⅲ期（8世紀中頃～後半）である。この時期は、正北位に軸を合わせた建物配置に変化し、二重の溝やその間の築地塙で内部を囲った区画が検出されている。溝からは多数の鉄鍬がまとめて出土しており、官衙的性格から軍事的性格へと変化したことが窺える。周辺では、小郡前伏遺跡4において正北位を意識した個性建物2棟と住居跡1基が確認されており、官衙との関連が想定される。この時期になると、周辺に形成される集落は大板井遺跡のみである。この時期に官衙機能が大刀洗町の下高橋官衙に移転したと想定されていることから、この移転に伴い、周辺の集落も移転した可能性が想定されよう。また、使用時期が不明ではあるが、小郡官衙の南側には筑紫平野東西官道が通っており、側溝からは7世紀前半頃～8世紀中頃の遺物が出土していることから、8世紀中頃以降に埋没したと考えられ、小郡官衙の官衙機能の衰退に伴い側溝が埋没していったと言える。

以上のように、大板井遺跡は、小郡官衙形成期から衰退期を含む長い期間にわたって連続と続いた集落遺跡であり、『和名類聚抄』にいう板井郷と考えられている。

3) 小結

大板井遺跡包蔵地内の発掘調査が開始されて約24年になるが、1つ1つの調査成果を面的に整理し、周辺遺跡との関係を検討することで、少しずつではあるが、当時の社会状況を解明しつつある。しかし、いまだ検討すべき課題は多く、今後も1つ1つの調査を精査し、社会復元へと考察していくことが求められよう。本書が、その一助になれば幸いである。

出土遺物観察表

1. 土器

法量=□、口径、高、器高、底、底径、裾、裾径、器種=併、弥生土器、土、土器類、漢、漢器類

探検 番号	遺物 番号	出土遺構	器種	法量 (単位)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
5-1		1号住居跡	弥生・甕	□(24.8) 高:5.95	外:灰褐色(5YR6/2) 内:赤褐色(5YR6/6)	30cm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	□～胴上の1/4	
5-2		1号住居跡	弥生・甕	□(23.1) 高:7.25	外:澄(15YR6/6) 内:赤褐色(7.5YR6/6)	20cm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケメ後ナデ 内:ヨコナデ、ハケメ後ナデ	□～胴上の1/2	
5-3		1号住居跡	弥生・甕	□(15.2) 高:8.0	外:にぶい赤褐色(5YR6/4) 内:にぶい黄褐色(7.5YR6/4)	20cm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ハケメ後ヨコナデ、ナデ	□～胴上の1/4	
5-4		1号住居跡	弥生・甕	□(18.2) 高:4.5	外:にぶい黄褐色(10YR5/3) 内:にぶい黄褐色(10YR6/6)	10cm以下の微砂粒を少し含む	良	外:ヨコナデ、タタキ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	□～胴上の1/6	
5-5		1号住居跡	弥生・甕	□(15.8) 高:3.3	外:にぶい赤褐色(2.5Y4/4) 内:澄(5YR6/6)	10cm以下の微砂を少し含む	良	外:ナデ 内:ヨコナデ、ハケメ	□～胴上の1/6	外蓋から内蓋口縁部にかけて丹塗り。
5-6		1号住居跡	弥生・甕	□(22.5) 高:21.9	外:にぶい黄褐色(10YR6/4) 内:澄(15YR7/6)	20cm以下の砂粒をやや多く含む	良	外蓋:ヨコナデ、タタキ、タタキ後ハケメ後ナデ 内蓋:ヨコナデ、ハケメ	□～胴下の1/6	外蓋にコグ付着、外蓋位置異なり。
5-7	5-3	1号住居跡	弥生・甕	□(31.0) 高:36.5	外:灰黄(2.5YR6/2) 内:淡黄(2.5R7/3)	20cm以下の砂粒をやや多く含む	劣	外:ハケメ、タタキ後ハケメ後ナデ 内:ヨコナデ、ハケメ	□～胴下の3/4	内蓋にス付着。
5-8	5-2	1号住居跡	弥生・甕	□(18.1) 底:6.4 高:26.4	外:にぶい黄褐色(10YR6/4) 内:灰黄褐色(10YR5/2)	30cm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ナデ、ハケメ、磨滅 内:ヨコナデ、ハケメ	□～底約1/1	外蓋にコグ付着。
5-9		1号住居跡	弥生・甕	底:6.0 高:4.3	外:赤褐色(5YR6/6) 内:灰黄褐色(10YR4/2)	10cm以下の砂粒を多く含む	良	外:ハケメ 内:ナデ	胴下～底約1/1	
5-10		1号住居跡	弥生・甕	底(7.6) 高:4.5	外:にぶい黄褐色(7.5YR7/4) 内:灰(5Y5/1)	10cm以下の微砂を多く含む	劣	外:ハケメ 内:ナデ	胴下～底約1/2	内蓋ス付着。
5-11	5-1	1号住居跡	弥生・甕	底:8.6 高:5.1	外:にぶい黄褐色(10YR5/3) 内:にぶい黄褐色(7.5YR5/4)	30cm以下の砂粒を多く含む	劣	外:ハケメ後板ナデ 内:ハケメ	胴下～底約1/2	底蓋はハケメ調整
5-12		1号住居跡	弥生・甕	底:(8.6) 高:5.0	外:にぶい黄褐色(10YR6/4) 内:にぶい黄褐色(7.5Y7/6)	20cm以下の砂粒を多く含む	劣	外:板ナデ 内:ハケメ、ナデ	胴下～底約1/4	底部外蓋はハケメ、内蓋にコグ付着。
5-13		1号住居跡	弥生・甕	底:(13.2) 高:4.15	外:灰黄褐色(10YR6/2) 内:にぶい黄褐色(10YR7/3)	30cm以下の砂粒をやや多く含む	劣	外:ハケメ 内:ナデ、押さえ	胴下～底約1/8	底部外蓋は板ナデ。
6-1		1号住居跡	弥生・甕	□(12.2) 底:7.0 高:19.2	外:にぶい黄褐色(7.5YR6/4) 内:にぶい黄褐色(10YR7/4)	20cm以下の砂粒を多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケメ後ナデ、磨滅 内:ヨコナデ、ハケメ、工具ナデ、ナデ	□～胴下の3/4 胴下～底約1/1	外蓋に黒煎と破断痕あり。
6-2	5-4	1号住居跡	弥生・甕	□(15.8) 高:21.2	外:にぶい赤褐色2.5YR5/4) 内:にぶい黄褐色(10YR7/4)	20cm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ナデ、ハケメ 内:ナデ、ハケメ後ナデ	□～胴下の1/2	外蓋に黒煎あり。
6-3		1号住居跡	弥生・複合口縁甕	高:4.7	外:淡黄褐色(10YR8/4) 内:にぶい黄褐色(10YR7/2)	20cm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ハケメ、ヨコナデ、ハケメ 内:ナデ、ハケメ	□～胴小片	外蓋口縁部に黒煎あり、外蓋口縁部黒煎に剥目。
6-4		1号住居跡	弥生・複合口縁甕	□(16.8) 高:5.2 高さ:8.1	外:赤褐色(5YR6/6) 内:赤褐色(5YR6/6)	20cm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	□～胴小片 胴～胴上の1/1	
6-5		1号住居跡	弥生・無蓋甕	□(8.8) 高:5.25	外:にぶい黄褐色(10YR7/4) 内:にぶい黄褐色(10YR7/4)	20cm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ナデ 内:ナデ	□～胴約1/6	
6-6	5-5	1号住居跡	弥生・鉢	□(19.6) 高:9.3	外:にぶい黄褐色(10YR7/3) 内:淡黄褐色(10YR6/4)	40cm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケメ、タタキ後ナデ、磨滅 内:ハケメ後ナデ、ヨコナデ	□～底約3/4	外蓋に一部赤色顔料が塗られている。
6-7	5-6	1号住居跡	弥生・鉢	□(24.0) 底:8.0 高:13.7	外:澄(15YR7/6) 内:にぶい黄褐色(10YR6/3)	20cm以下の砂粒を多く含む	劣	外:ヨコナデ、ハケメ後ナデ 内:ヨコナデ、ハケメ、磨滅	□～胴上の1/2 胴下～底約1/1	底部外蓋はハケメ、内蓋に破断痕あり、外蓋にコグ付着、磨滅痕あり。
6-8	5-7	1号住居跡	弥生・鉢	□(20.2) 底:(4.2) 高:11.85	外:にぶい黄褐色(7.5YR6/4) 内:にぶい黄褐色一層(10YR6/3)～3YR6/6)	30cm以下の砂粒を多く含む	劣	外:ヨコナデ、タタキ、工具ナデ、ナデ 内:ナデ、ハケメ	□～底約1/3	口縁部に剥目、外蓋に黒煎あり。
6-9	6-1	1号住居跡	弥生・鉢	□(10.2) 底:(4.0) 高:3.8	外:にぶい黄褐色(7.5YR6/4) 内:澄(5YR6/6)	20cm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ナデ	□～底約1/2	
6-10	6-2/3	1号住居跡	弥生・鉢	□(25.8) 底:(5.0) 高:11.8	外:にぶい赤褐色(5YR6/6) 内:赤褐色5YR4/5)	20cm以下の砂粒をやや多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケメ後ナデ 内:ハケメ後ナデ、ハケメ、ナデ	□～底約1/2	外蓋にコグ付着、外蓋に黒煎あり、底部に模成物の穿孔(外一内)あり。

図面 番号	図名	仕上仕様	仕様	法要mm (元単位)	色調	地土	構成	調整	残存率	備考	
7-1	1号住居 跡	外・高坪	幅:18.0 高:4.2	外:赤青焼(2.5YR5/6) 内:灰黄(2.5Y8/2)	1m以下の微砂を 少し含む	良	外:遮風、ココナ テ、葎、ナデ	断一層約1/6	断一層約1/6	外壁全面塗り、 内面裾部付近が一部塗り。	
7-2	1号住居 跡	外・舞台	幅:13.0 高:3.0	外:灰黄(2.5Y8/2) 内:灰黄(2.5Y8/2)	2m以下の微砂を やや多く含む	良	外:ハケム、遮風 内:押さえ、ココナ テ	断一層約1/6	断一層約1/6		
7-3	1号住居 跡	外・舞台	幅:16.6 高:3.6	外:焼(1.5YR6/6) 内:にじみ(7.5YR6/4)	2m以下の微砂を やや多く含む	劣	外:遮風 内:押さえ、ハケム	断一層約1/6	断一層約1/6		
7-4	1号住居 跡	外・舞台	幅:12.0 高:5.4	外:にじみ(黄緑 10YR6/4) 内:にじみ(黄緑 10YR7/3)	2m以下の微砂を 多く含む	良	外:ハケム、ココナ テ、ハケム、ココナ テ	断一層約1/6	断一層約1/6		
7-5	1号住居 跡	外・舞台	幅:18.6 高:6.6	外:にじみ(黄緑 10YR7/3) 内:灰黄(2.5Y8/3)	3m以下の微砂を やや多く含む	良	外:ハケム、ココナ テ、ナデ、ハケム、ココ ナテ	断一層約1/4	断一層約1/4		
7-6	6-10	1号住居 跡	幅:13.3 高:13.75	外:にじみ(黄緑 10YR6/4) 内:にじみ(黄緑 10YR6/3)	4m以下の微砂を やや多く含む	良	外:ハケム後ナデ、タ タキ後ナデ、ココナ テ、葎、ハケム後ナ デ	断一層約1/2	断一層約1/2	内面一部スチ付着。	
7-7	1号住居 跡	外・壁	口:32.2 高:3.5	外:にじみ(黄緑 10YR6/4) 内:にじみ(黄緑 7.5YR6/4)	3m以下の微砂を やや多く含む	良	外:ココナ テ、ココナ テ	口一層約1/4	口一層約1/4		
7-8	9-5	1号住居 跡	幅:8.1 高:7.5 高:8.9	外:浅黄焼(10YR6/4) 内:—	1m以下の微砂を 少し含む	良	外:ナデ、工具 内:—	断一層	断一層	被焼。	
7-9	6-6	1号住居 跡	幅:9.3 高:9.3 高:10.8	外:にじみ(黄緑 10YR7/4) 内:—	1m以下の微砂を 少し含む	良	外:ナデ、工具 内:—	断一層	断一層		
7-10	6-4	1号住居 跡	幅:12.4 高:12.6 高:12.6	外:焼(1.5YR6/6) 内:—	1m以下の微砂を 少し含む	良	外:押さえ、ナデ、工具 内:—	断一層	断一層		
13-1	2号住居 跡	土・壁	口:20.4 高:5.4	外:焼(1.5YR6/6) 内:焼(1.5YR6/6)	1m以下の微砂を 多く含む	良	外:ココナテ、葎 内:遮風、ヘラ削り	口一層約1/6	口一層約1/6		
13-2	7-5	3号住居 跡	幅:10.7 高:2.7	外:灰黄(2.5Y7/2) 内:にじみ(黄緑 10YR7/4)	1m以下の微砂を 多く含む	良	外:ナ テ、ナ テ	断一層約1/2	断一層約1/2	外壁に黒鼠あり。	
13-3	5号住居 跡	溝・坪身	口:13.8 高:2.1	外:灰白(2.5Y7/1) 内:灰黄(2.5Y7/2)	1m以下の微砂を 多く含む	良好	外:回転ナ テ、内 回転ナ テ	口一層約1/6	口一層約1/6		
13-4	5号住居 跡	溝・坪身	口:14.0 高:3.2	外:灰白(2.5Y7/1) 内:灰黄(2.5Y7/2)	1m以下の微砂を かなり多く含む	良好	外:回転ナ テ、内 回転ナ テ	口一層約1/10	口一層約1/10		
13-5	5号住居 跡	溝・坪身	口:11.8 高:2.75	外:灰白(2.5Y7/1) 内:灰(3Y5/1)	1m以下の微砂を 多く含む	良好	外:回転ナ テ、内 回転ナ テ	口一層約1/2	口一層約1/2		
13-6	7-4	5号住居 跡	口:14.8 高:10.8 高:12.4	外:焼(1YR6/6) 内:焼(5YR6/6)	1m以下の微砂を 多く含む	良	外:回転ナ テ、内 回転ナ テ	口一層約1/12	口一層約1/12		
13-7	7-3	5号住居 跡	口:10.2 高:1.3	外:焼(10Y7/6) 内:焼(5YR7/6)	1m以下の微砂を 多く含む	良	外:回転ナ テ、内 回転ナ テ	断一層約1/4	断一層約1/4	底部はヘラ削り。	
13-8	7-1	5号住居 跡	口:15.0 高:4.1	外:焼(5YR6/6) 内:にじみ(黄緑7.5YR6/4)	2m以下の微砂を やや多く含む	良	外:ココナテ、ハケム 内:ココナテ、ヘラ削り	口一層約1/5	口一層約1/5		
13-9	7-2	5号住居 跡	口:11.8 高:5.05	外:焼(5YR6/6) 内:焼(5YR6/6)	6m以下の微砂を 多く含む	良	外:ココナテ、ハケム 内:ココナテ、ヘラ削り	口一層約1/4 底完形	口一層約1/4	底完形	
13-10	6号住居 跡	外・壁	高:3.9	外:にじみ(黄緑10YR 7/4) 内:にじみ(黄緑10YR 7/4)	2m以下の微砂を 多く含む	良	外:ココナテ、ハケム 内:ココナテ、ナ デ	口一層小片	口一層小片		
13-11	6号住居 跡	外・種倉口縁 臺	高:2.8	外:浅黄(2.5Y7/3) 内:浅黄(2.5Y8/3)	1m以下の微砂を やや多く含む	良	外:ココナ テ、内 ココナ テ	口小片	口小片	外壁にスチ付着。	
13-12	7号住居 跡	土・壁	高さ:3.3	外:焼(1.5YR6/6) 内:にじみ(黄緑7.5YR6/4)	1m以下の微砂を 多く含む	良	外:ココナ テ、内 ナ テ	口一層小片	口一層小片		
13-13	7号住居 跡	土・小型臺	高:3.3	外:にじみ(黄緑7.5YR6/4) 内:灰黄焼(10YR6/2)	1m以下の微砂を 多く含む	良	外:ココナ テ、内 ココナ テ、ヘラ削り	口一層小片	口一層小片		
13-14	7-6	7号住居 跡	幅:9.4 高:4.8	外:にじみ(黄緑10YR 6/4) 内:—(断面の不明)	1m以下の微砂を やや多く含む	良	外:押さえ、ナ テ、内 —(削 削)	断一層約1/5	断一層約1/5		
13-15	1号周溝 状遺構	外・壁	高:1.6	外:浅黄焼～にじみ(黄 10YR6/4～10YR7/3) 内:にじみ(黄緑10YR 7/4)	1m以下の微砂を やや多く含む	良	外:ココナ テ、内 ココナ テ	口小片	口小片	外壁にスチ付着。 内面にコク付着。	
13-16	1号周溝 状遺構	外・広口臺	高:2.4	外:にじみ(黄緑10Y R7/4～10YR6/4) 内:にじみ(黄緑10Y R7/4)	2m以下の微砂を 少し含む	良	外:ココナ テ、内 ココナ テ	口小片	口小片	口縁部に割目。 外壁に付着。	
13-17	1号周溝 状遺構	外・階段臺	高:5.0	外:赤青焼(2.5YR5/6) 内:赤青焼(2.5YR5/6)	3m以下の微砂を 少し含む	良	外:ヘラ削り、ココ ナ テ、内 ココ ナ テ	断小片	断小片	外壁に横文あり、 内坪面とも寸が差ら れている。	
13-18	1号周溝 状遺構	外・土エテ ア土臺(脚 台)	幅:(5.5) 高:2.45	外:浅黄～にじみ(黄 2.5Y7/3～2.5Y8/3) 内:浅黄～にじみ(黄 2.5Y7/3～2.5Y8/3)	7m以下の微砂を やや多く含む	良	外:ハケム、ココナ テ、内 葎、後 ナ テ	断一層約1/5	断一層約1/5		
13-19	7-9	1号溝	高:9.2	外:にじみ(黄緑7.5YR6/4 ～7.5YR7/4) 内:焼(1.5YR6/6)	3m以下の微砂を やや多く含む	良	外:ナ テ、内 ヘラ削り	掘手約1/1	掘手約1/1		

棟別 番号	図面 番号	出土遺構 名称	種類	法量m (單元組)	色調	胎土	焼成	調整	残存率	備考
10-1		1号土坑	弥生	高:3.5	外:にぶい黄緑 (10YR7/4) 内:浅黄緑(10YR8/3)	2m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:ナデ 内:磨滅	鹿小片	
10-2		2号土坑	弥生・構築跡台	高:1.35	外:にぶい黄緑 (10YR6/3) 内:にぶい黄緑 (10YR6/3)	2m以下の砂粒を 少し含む	良	外:ハケム後へうらぎ キ、ヨコナデ 内:ヨコナデ	鹿小片	
10-3		3号土坑	弥生	高:2.95	外:にぶい黄緑(7.5YR7/4) 内:灰白(5Y7/2)	2m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:磨滅 内:へうらぎキ、ヨコ ナデ	鹿小片	
10-4		3号土坑	弥生・構築跡台	高:5.15	外:にぶい黄緑(7.5YR6/4) 内:にぶい黄緑(7.5YR6/4)	2m以下の砂粒を 少し含む	良	外:へうらぎキ、ヨコ ナデ 内:へうらぎキ	口小片	
10-5		4号土坑	弥生	高:2.6	外:浅黄緑(10YR6/4) 内:浅黄緑(10YR6/4)	2m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、磨滅	口小片	
10-6		4号土坑	弥生	高:2.75	外:にぶい黄緑 (10YR7/4~10YR6/4) 内:浅黄緑(7.5YR6/4)	3m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ナデ	口小片	外面にスス付着。
10-7		4号土坑	弥生	高:5.1	外:にぶい黄緑 (10YR7/3) 内:にぶい黄緑 (10YR7/3)	2m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:ハケム、ヨコナデ 内:ハケム、ヨコナデ	鹿小片	外周突帯構造に割目あり。
10-8	7-7	5号土坑	弥生・跡台	縦(10.3) 高:6.3	外:にぶい黄緑 (10YR7/4) 内:にぶい黄緑 (10YR7/4)	3m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:ナデ、ヨコナデ 内:ナデ、ヨコナデ	鹿~鹿約1/5	
10-9	0-2	6号土坑	土・坪身	底(7.6) 高:1.8	外:浅黄緑~緑 (10YR6/2~5YR7/4) 内:浅黄緑(10YR6/3)	2m以下の砂粒を 少し含む	良	外:回転ナデ 内:回転ナデ後ナデ	鹿~鹿約1/4	底面は手持ちへうらぎ。
10-10		6号土坑	土・溝	高:3.35	外:灰黄(2.5Y7/2) 内:灰黄(2.5Y7/2)	2m以下の砂粒を 多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケム 内:ハケム	口~閉上小片	外面にスス付着。
10-11	0-1	6号土坑	土・溝	底(6.4) 高:3.7	外:にぶい黄緑(7.5YR7/4) 内:にぶい黄緑(7.5YR7/4)	1m以下の微砂を 少し含む	良	外:回転へうらぎ 内:回転ナデ、回転ナ デ後ナデ	鹿~鹿約1/3	底面は回転へうらぎ。
10-12		7号土坑	土・溝	高:1.95	外:にぶい黄緑 (10YR6/3) 内:にぶい黄緑 (10YR6/3)	2m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、へうらぎ	口~鹿小片	外面にスス付着。
10-13	0-0	8号土坑	土・坪身	口(13.9) 底(9.4) 高:3.7	外:灰黄(2.5Y7/2~ 2.5Y6/2) 内:灰黄~薄灰黄 (2.5Y7/2~2.5Y5/2)	2m以下の砂粒を 少し含む	良	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ	口~鹿約1/5	底面はへうらぎ切り後ナデ。
10-14	0-9	8号土坑	土・坪身	口(12.3) 底(7.6) 高:3.4	外:にぶい黄緑~赤 (10YR6/3~7.5YR7/4) 内:にぶい黄緑(7.5YR6/4)	5m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:回転ナデ 内:回転ナデ	口~鹿約1/4	底面はへうらぎ。 底面にへうらぎあり。
10-15		8号土坑	溝・溝	底(10.3) 高:6.5	外:灰(5Y6/1) 内:灰(5Y6/1)	3m以下の砂粒を やや多く含む	良好	外:回転へうらぎ 内:回転ナデ	鹿下~鹿約1/5	底面は回転へうらぎ。
10-16	0-10	8号土坑	土・溝	口(26.9) 底(6.9)	外:にぶい黄緑~暗緑 (10YR6/4~7.5YR6/6) 内:にぶい黄緑~にぶい 黄緑(7.5YR6/4~5YR6/4)	3m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケム 内:ハケム、へうらぎ	口~鹿約1/5	内面にスス付着。
10-17	0-14	9号土坑	溝・坪身	高:1.3	外:灰白(5Y7/1~ 5Y6/1) 内:灰白(5Y7/1~ 5Y6/1)	1m以下の微砂を ごくわずかに含む	やや劣	外:回転ナデ 内:回転ナデ後ナデ	つまみ約1/1	つまみ部底面に墨書あり。
10-18		10号土坑	土・溝	高:2.75	外:にぶい黄緑(7.5YR6/4) 内:にぶい黄緑(7.5YR6/4 ~7.5YR6/6)	3m以下の砂粒を 多く含む	良	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、へうらぎ	口~閉上小片	
10-19		10号土坑	弥生	高:2.85	外:にぶい黄緑 (10YR7/4) 内:にぶい黄緑 (10YR7/4)	2m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:ヨコナデ、ハケム 内:ヨコナデ、ナデ	口~鹿小片	外面にスス付着。
10-20		11号土坑	溝・坪身	高:3.65	外:灰(5Y7/1) 内:灰白(5Y7/1)	3m以下の砂粒を 少し含む	良	外:回転ナデ 内:回転ナデ	口~鹿小片	
10-21	0-11	11号土坑	土・坪身	口(12.3) 底(6.6) 高:3.4	外:にぶい黄緑(7.5YR7/4) 内:にぶい黄緑~にぶい 黄緑(10YR7/3~ 7.5YR7/4)	1m以下の微砂を ごくわずかに含む	良	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ	口~鹿約1/5	底面は回転へうらぎ切り後ナデ
20-1		P2	弥生	高:2.6	外:にぶい黄緑~にぶい 黄緑(10YR7/3~ 7.5YR7/4) 内:浅黄緑(10YR6/4)	5m以下の砂粒を 多く含む	良	外:ハケム後ナデ 内:ハケム後ナデ、ナデ	鹿完形	内面にコゴ付着。 底面は手持ちへうらぎ。
20-2	7-8	P6	土・把手	高:4.3	外:にぶい黄緑~にぶい 黄緑(7.5YR6/4~10Y R7/4)	2m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:ナデ	把手約1/1	
20-3		P15	土・坪身	高:2.8	外:緑~にぶい黄緑(7.5Y R6/6~7.5YR6/3) 内:にぶい黄緑~にぶい 黄緑(7.5YR6/4~7.5YR6/4)	1m以下の微砂を 多く含む	良	外:回転ナデ 内:回転ナデ	口~閉小片	
20-4		P22	土・溝	高:4.2	外:にぶい黄緑(7.5YR7/4) 内:緑~にぶい黄 緑(5YR6/6~7.5YR6/4)	2m以下の砂粒を やや多く含む	良	外:ヨコナデ、磨滅 内:ヨコナデ、磨滅	口~閉小片	

検出 番号	図面 番号	出土遺構	器種	法重cm (法尺重)	色調	胎土	肌	調整	残存率	備考
2-5	8-12	P26	土・鉢	高 5.5	外: 紅(5YR7/4) 内: 紅(5YR7/4)	3mm以下の砂粒を やや多く含む	良	外: コナナデ、ハケム 内: コナナデ、ヘラ刷り	口~胴小片	外面にスス付着。
2-6		P36	土・壺	高 4.4	外: 紅(5YR7/4) 内: 紅(5YR7/4)	8mm以下の砂粒を やや多く含む	良	外: コナナデ、ハケム 内: コナナデ、ヘラ刷り	口~胴小片	
2-7		P50	土・小形壺	高 6.4	外: 紅(5YR7/4) 内: 紅(5YR7/4)	2mm以下の砂粒を やや多く含む	良	外: コナナデ、ハケム 内: コナナデ、ヘラ刷り	口~胴小片	外面にスス付着。 内面にコゴ付着。
2-8	8-13	P50	土・鉢	口 (30.0) 高 7.4	外: 紅(5YR6/4)~ 紅(5YR6/8) 内: 紅(5YR6/8)~ 紅(5YR6/3)	1mm以下の砂粒を やや多く含む	良	外: コナナデ、ハケム 内: コナナデ、ヘラ刷り	口~胴下約1/5	外面にスス付着。 内面にコゴ付着。
2-9		P56	弥・高杯	高 4.9	外: 赤黄緑(2.5Y5/6) 内: 黄(5YR6/8)	2mm以下の砂粒を 少し含む	良	外: ヘラシガキ、 コナナデ 内: ハケム	胴小片	外面に赤色顔料塗ら れている。
2-10		P61	弥・陶製器台	高 2.6	外: 黄(5YR6/8) 内: 黄(5YR6/8)	3mm以下の砂粒を 少し含む	良	外: ヘラシガキ、 コナナデ 内: コナナデ	胴小片	外面に赤色顔料塗ら れている。
2-11		P62	土・壺	高 3.8	外: 紅(5YR6/4) 内: 黄緑(2.5Y5/3)	3mm以下の砂粒を やや多く含む	良	外: コナナデ、ハケム 内: コナナデ、ヘラ刷り	口~胴小片	内面に黒痕あり。
2-12		P63	土・鉢	口 (13.2) 高 3.25	外: 黄(5YR6/8) 内: 黄(5YR6/8)	1mm以下の砂粒を 多く含む	良	外: 回転ナデ、 内: 回転ナデ、ナデ	口~胴約1/6	
2-13	8-7	P63	土・鉢	底(6.6) 高 2.3	外: 黄(5YR6/8) 内: 黄(5YR6/8)	1mm以下の砂粒を 多く含む	良	外: 回転ナデ、 内: 回転ナデ	胴~底約1/4	底部はヘラ切り。
2-14		P63	弥・壺	口 (14.8) 高 5.5	外: 黄(5YR6/8) 内: 紅(5YR5/3)	1mm以下の砂粒を 多く含む	良	外: コナナデ、ハケム 内: コナナデ、ハケム	口~胴上約1/4	
2-15		P63	土・壺	底(6.6) 高 3.5	外: 紅(5YR6/8) 内: 黄緑(10YR4/2)	1mm以下の砂粒を 多く含む	良	外: ナデ 内: ナデ、ナデ	胴下~底約1/3	外面に黒痕あり。
2-16	8-5	P65	土・壺	底(6.6) 高 1.85	外: 黄(5YR6/8) 内: 黄(5YR7/4)	1mm以下の砂粒を 多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	底約1/2	底部はヘラ切り。
2-17	8-3	P65	土・鉢	高 2.75	外: 紅(5YR7/4) 内: 紅(5YR7/4)	1mm以下の砂粒を やや多く含む	良	外: 回転ナデ、 内: 回転ナデ、ナデ	口~胴小片	
2-18		P69	弥・溝・片蓋	高 1.4	外: 灰(10A0) 内: 灰(10S0)	1mm以下の砂粒を かなり多く含む	良好	外: 回転ヘラ刷り、 内: 回転ナデ	体~胴小片	
2-19		P70	弥・灰口壺	高 2.45	外: 黄(5YR6/8) 内: 赤黄緑(5YR5/8)	1mm以下の砂粒を 多く含む	良	外: 黄緑、 内: 黄緑、コナナデ	口~胴小片	
2-20	8-6	P80	土・鉢	底(6.6) 高 1.5	外: 紅(5YR6/4) 内: 紅(5YR7/4)	1mm以下の砂粒を 多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	胴~底約1/4	底部はヘラ切り。
2-21	8-4	P93	土・鉢	口 (11.8) 底(6.6) 高 3.0	外: 灰(2.5Y6/2) 内: 灰(2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒を 多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	口~底約1/6	底部はヘラ切り。
2-22		P100	弥・溝・片蓋	高 2.2	外: 灰(10Y5/1) 内: 灰(15Y6/1)	1mm以下の砂粒を 少し含む	良好	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	胴~底小片	底部はヘラ切り。
2-23		P101	弥・高杯	高 4.2	外: 赤黄緑(10YR6/4) 内: 黄(5YR7/8)	1mm以下の砂粒を 少し含む	良	外: ハケム、 内: コナナデ、ヘラ刷り	口~杯小片	
2-24		P102	弥・小形壺	高 3.55	外: 紅(5YR6/4) 内: 赤黄緑(10YR6/4)	4mm以下の砂粒を 多く含む	良	外: 黄緑 内: ナデ、ヘラ刷り	口~胴上小片	
2-25		P103	土・坪舟	口 (11.8) 高 3.5	外: 紅(5YR6/4) 内: 紅(5YR6/4)	1mm以下の砂粒を 多く含む	良	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	口~底約1/4	

2. 石器

検出 番号	図面 番号	出土遺構	種類	計測値				備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
8-1	8-9	1号位原跡	石慮丁	3.55	5.15	0.4	12.2	
8-2	8-7	1号位原跡	石慮丁	4.50	6.55	0.6	25.0	石材 輝緑凝灰岩
8-3	8-8	1号位原跡	石慮丁	4.15	7.4	0.7	29.8	
8-4	6-11	1号位原跡	勾玉束成爪	4.2	2.4	0.8	11.2	
8-5	7-11	1号位原跡	投槍	5.0	3.15	1.8	45.0	
8-6	6-12	1号位原跡	碇石	15.0	16.1	10.4	2340.0	石材 砂岩、被熱痕あり。
13-19		1号埋没状遺構	石銃	2.90	3.25	1.8	16.6	石材 凝灰岩
19-2	P48		石銃束成爪	3.95	3.25	1.0	10.2	石材 凝灰岩
19-3	7-10	P78	碇石	6.00	7.55	3.7	175.0	

3. 土製品

検出 番号	図面 番号	出土遺構	種類	計測値				備考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
19-1	8-15	P63	土器	5.3	1.15	1.1	5.7	工具で面を取りながら丸く仕上げている。



①調査区全景（真上から）



②1号住居跡完掘（真上から）



④1号住居跡遺物出土状況 up（西側から）



③1号住居跡遺物出土状況（西側から）



⑤1号住居跡遺物出土状況 up（西側から）



① 2号住居跡完掘 (東側から)



④ 3号・7号住居跡土層断面 (西側から)



② 3号住居跡完掘 (西側から)



⑤ 5号住居跡カマド検出状況 (南側から)



⑥ 5号住居跡完掘 (南側から)



③ 7号住居跡完掘 (東側から)



⑦ 6号住居跡完掘 (東側から)



① 1号周溝状遺構完掘 (東側から)



⑤ 1号溝完掘 (東側から)



② 1号周溝状遺構東壁土層断面 (西側から)



⑥ 1号土坑完掘 (北側から)



③ 1号周溝状遺構・1号土坑土層断面 (北側から)



⑦ 2号土坑完掘 (東側から)



④ 1号溝東壁土層断面 (西側から)



⑧ 3号土坑完掘 (東側から)



① 4号土坑土層断面 (北側から)



⑤ 7号土坑完掘 (北側から)



② 4号土坑完掘 (北側から)



⑥ 8号土坑完掘 (南側から)



③ 5号土坑完掘 (東側から)



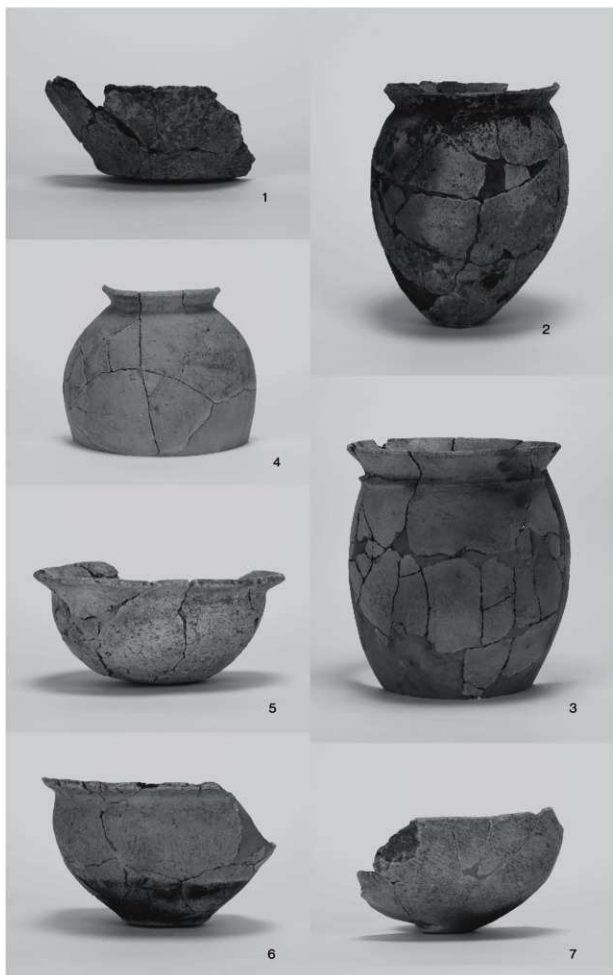
⑦ 9号土坑完掘 (南側から)



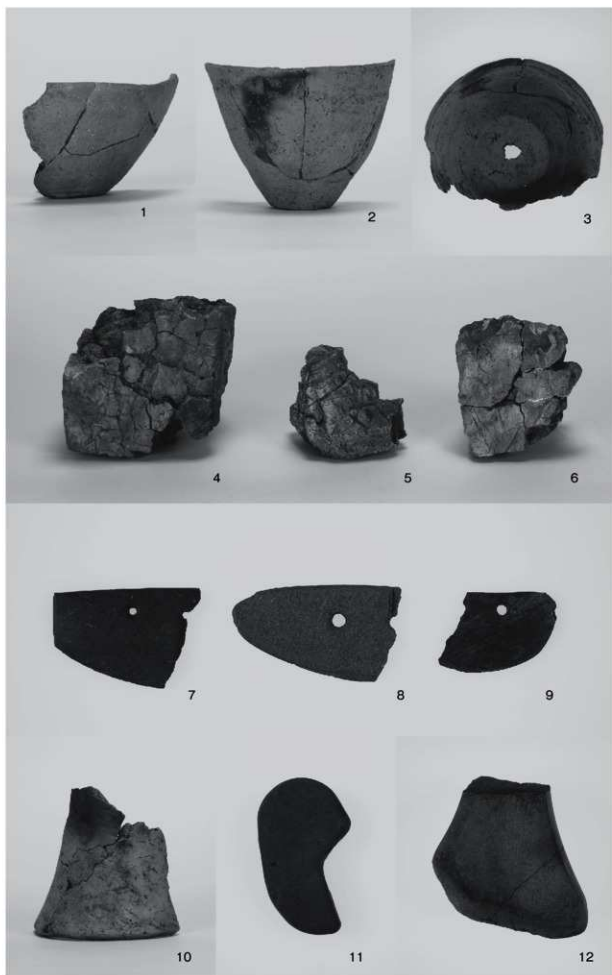
④ 6号土坑完掘 (北側から)



⑩ 10号土坑完掘 (南側から)



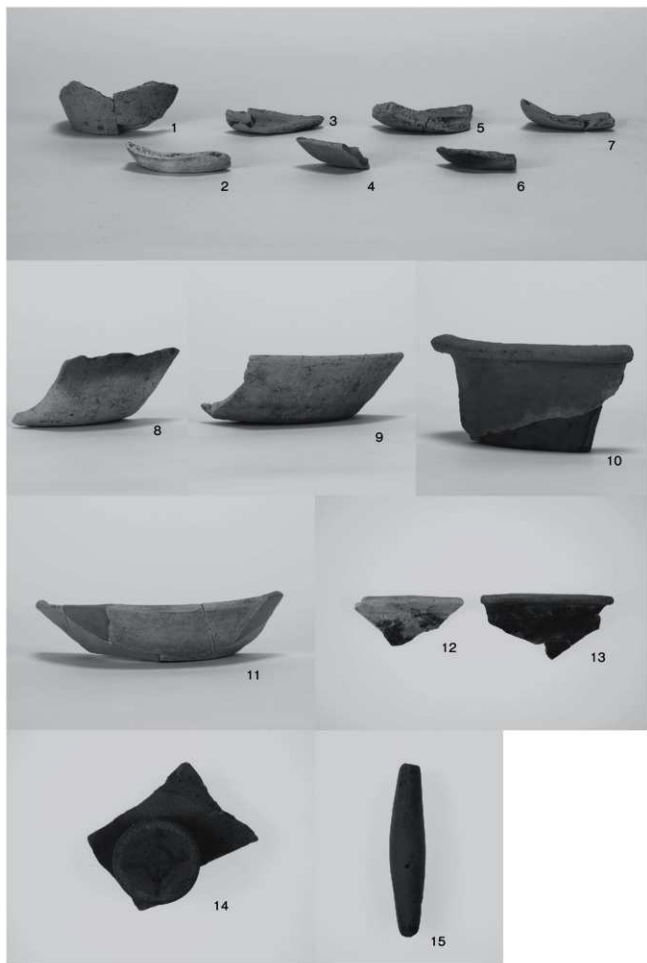
出土遺物①



出土遺物②



出土遺物③



出土遺物④

報告書抄録

ふりがな	おおいたいいせき								
書名	大板井遺跡 29								
副書名	福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告								
巻次									
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 306 集								
編著者名	西江 幸子								
編集機関	小郡市教育委員会								
所在地	〒838-0198 福岡県小郡市小郡 255-1 Tel. 0942-72-2111								
発行年月日	平成28年3月31日								
所収遺跡名	所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
大板井遺跡 29	福岡県 小郡市 大板井	40216		33° 23′ 58″	130° 33′ 33″	2014.6.10 } 2014.8.11	170 m ²	店舗建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
大板井遺跡 29	集落	弥生 古代	住居跡 周溝状遺構 溝 土坑	弥生土器 土製品 石器 石製品 土師器 須恵器					
特記事項	<p>今回の調査地は、大板井遺跡包蔵地内でも特に遺構密度の高い地域であり、矮小な調査面積ではあったが、住居跡を中心に多くの遺構を検出した。検出した遺構は、弥生時代中期中葉～後半と後期後半、7世紀後半～8世紀後半を中心としていた。特に、弥生時代中期は小郡市内において代表的な拠点集落として評価されており、今回の調査地がその中心部であることから、多くの成果を得られた。また、近年、研究が深化しつつある小郡官衙遺跡周辺に位置していることから、7世紀後半～8世紀後半にかけての遺構を検出できたことも大きな成果となった。大板井遺跡は、矮小な調査区を1ペース毎に評価し合うことで地域の歴史的復元を行ってきた地域であり、今回の成果もその一助となったと言える。</p>								

大板井遺跡 29

小郡市文化財調査報告書第 306 集

平成28年 3月31日

編集 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 255-1

発行 片山印刷株式会社
福岡県小郡市祇園1丁目8-15